

「幻魔宇宙」

幻魔大戦 ①

平井和正

Kazumasa Hirai

立ち読み禁止版



Vega



目次

幻魔宇宙

救世主はどこにいる

イラスト/勝連



漆黒のビロード地の向う側に強い光源があるように、大天蓋^{てんがい}をびつしりと埋め尽くした星群の輝きだ。

おびただしい星辰の瞬きの中にまぎれこんで、機体の標識灯を明滅させ、心細げにのろのろと星空をよぎっていくジェット・ライナーがあつた。

トランスワールド航空の国際線を飛ぶDC 8の夜間飛行は、さながら孤独な旅人を想わせる姿だつた。

巨大な空間のまっただ中に宙吊りになっている時、膨大^{ぼうだい}な星々の輝きは身近に、そして地上は遙^{はる}かに遠く虚^{うつろ}ろであつた。

夜間飛行には、いつもいくばくかの孤独感がつきまとつている。地表は濃い暗闇の底に消え失せてしまい、己れ自身はあまりにも巨大すぎる虚空のさなかにまぎれこんでしまつせいかもしれない。自分の空間座標をすでに確かめるすべもなく、地上に残してきた一切の親密なものと同切り離された孤独感がもたらす寂しさなのであろう。

機内の照明はほとんど消され、機内で上映されていた映画の光と影のたわむれも失われて、倒した座席の背に頭をあずけた人々の平穏な寝息が漂ってくる。

二重ガラスの機窓は小さく暗く、目をあそばせて心をおこわせる何物も今は見えない。機内を巡回するスチューワー

デスたちの足音も間遠になった。ジェット噴射の単調な震動が時折、意識の表面にのぼってくるだけで、機体は安定し、きわめて平穏だ。

パリのオルリー空港を飛び立ち、大西洋を横断してニューヨークのケネディ空港へ向うジェット・ライナーの機体前部を占めるファースト・クラスには、訪米途上にあるヨーロッパの小王国トランシルヴァニアの第一王女、ルナ姫の姿が見られた。

“ヨーロッパの宝石”とうたわれ、ファースト・クラスの乗客の関心を独占している高貴な美貌だ。

黄金の髪と類いのない碧い瞳は、彼女をなにかしら地上のものではないように際立たせている、凄みがあるほどの美の属性だった。

ハリウツドがよだれを流して欲しがっている真の珠玉だ。高貴で神秘的で類い稀れな美貌は、単なる美人女優たちを、満月の光輝に圧倒される星々と同じく輝きを失わせてしまうだろうといわれていた。

ルナ姫はまぎれもなく単なる美女ではないと、だれの目にも明白だった。彼女の裡にはなにかしら冴えざえと燃える核のようなものがあり、内奥から漏洩するリークのような輝きが、ルナ姫を他のものから画然と分っていたのである。

裡で燃えるものが不眠と化して、シートに埋まりこんだルナ姫を捉えていた。時折訪れる興奮状態がずっと居座り

続けているのだ。べつに異常なことではない。この種の特
殊な気分の高揚は、幼い時分からの彼女の親しい伴侶ほんりよであ
った。

膝の上に広げた真紅のビロードの布地に一箇の水晶球が
載り、ルナ姫の両手はその表面にかざされ、小止みなく動
き続けている。神秘家ミステイクが占いに用いる水晶球である。ルナ
姫を凡百の美人と分つのは、彼女の未来透視の巨大な才能
のゆえであった。

すでにして幼少時からあら顕われた超常的な才能は、ルナ姫
にヨーロッパ最大の神秘家としての知名度を与えつつあっ
た。

トランシルヴァニア王国はひどく貧しい。諸国の経済援
助を取りつけるのが、外交使節であるルナ姫の任務であり、
華やかな大霊能者としてのルナ姫の名声がおおいに役立つ
ていた。トランシルヴァニアには国庫を潤おす財源になる
資源も産業もほとんど皆無に等しい。人口一万人足らずの
極小国は、国家の体面を維持する可能性を、毎年の人口増
加とともに失いつつあった。

それを産業と呼べるかどうかはわからないが、トランシ
ルヴァニア王国がわずかに外貨を稼ぐことを可能にしてい
るのは、ジーベンヴュルゲン王家が代々生み出している、
妖怪ようかいじみた超常能力者E.S.Pの血であった。

すなわち、第一王女ルナ姫の占い師ミステイクの才能によって、小
王国は辛うじて生計をたてているのだった。

十八歳の美少女ルナは、人口約一万の扶養すべき大家族に取りすがられていたのである。

ファースト・クラスの乗客の一人がシートのポケットにさしこんでいる英字新聞の社交欄には、ルナ姫の写真と訪米に関する記事が大きく掲載されていた。

その記事は、ルナの神秘的な美をたたえるとともに、彼女の持ち合わせている風変りな才能を大仰にあげつらっていた。

それによれば、ルナ姫は予言と呼ばれる未来予知能力を始め、遠隔視（千里眼）、遠感、過去認知、催眠、星体放射など、超心理学のテキストの項目に並ぶ超常能力を一人占めするオールラウンド・プレイヤーということになっていた。

ルナ姫がトランシルヴァニア王国の親善使節として、洪い各国の経済援助を取りつける信じがたいほどの業績の裏には、彼女の異常レベルに達した催眠能力が一役買っているのではないかと推測し、記者は、あの類い稀れな美しい瞳で見詰められれば、だれしも催眠術以上の効果を認識せざるを得まいとつけ加えていた。

ルナ王女のおもむくところ、常に小鳥たちが群れ集って、プリンセスの魅惑をたたえ、そのかぐわしい吐息にふれた庭園の花々はいっせいにツボミを開くという噂にはかなりの信憑性がある、と記者は揶揄の筆致をはずれて、シリアスに書き、

なお、美しいルナ姫の今回の訪米のきっかけになったのは、例によって夢のお告げによるものらしいが、プリンセスの予知夢の内容を知る者は今回に限ってだれもない。親善使節として表敬訪問に先立ち、これまで毎回夢の内容を詳細に発表していた慣例からすると、今回のルナ姫の沈黙は異例でもあり、大方の失望を買っているようだ。

しかし、いずれにせよ、愛らしく美しいプリンセスの見る夢もまた、プリンセスにふさわしいハッピーな美しい夢であるに違いない

記事は歯が浮く類いの決まり文句でしめくくられていた。この手のくだらない社交界記者の記事は罪がないほうで、セールスマンとしてのルナ姫の行状をえげつなくでつちあげる赤新聞によれば、ルナ姫は米合州国へ金をせびりに出かけるのだそうだった。ルナ姫と米国高官や大富豪とのうさんくさい仲をでつちあげるくらい平気でやってのける低級紙も多いのだ。無邪気な人間が読めば、ルナ姫は美しき国家的売春婦だと思いきんてしまつほどであった。

低俗なジャーナリズムの腐肉獣ハイエナを気にしたところでもうにもなるものではない。ルナ姫はそれらの侮辱たいまつを有名税として無視する境地に達していた。

それでなくとも、小柄なかぼそい体に荷ないがたい重荷を背負っているルナであった。

膝の上の水晶球に見入るルナ姫の瞳は、自己陶醉者のそ

れに似た光で満たされていた。二時間ほども、まったく姿勢を変えていないのだ。トランス状態に入った霊能者以外には不可能な業わざであった。

見るに見かねて、ルナ姫の随行者が、ルナ姫の覚醒かくせいをうながした。禿頭はげあたまの恐ろしく長身のキリギリスのように痩せこけた年寄りであった。見るからに融通のきかない一徹者の顔をしている。ルナ姫が外遊先で羽目はずさぬよう目付役を務めているのだ。凄美美人のルナ姫は国際的プレイボーイの狙う標的である。

もちろん多忙なルナ姫は、トランスシルヴァニア臣民の糊こ口こうをしのぐのに精一杯であり、色恋沙汰に浮身をやつす暇もあればこそだが、人の目にはそうは映らないらしい。トランスシルヴァニア王国の忠臣どもにとっては、いかにも危つかしい気ままな小娘なのであろう。

「プリンセス、明日も朝からハード・スケジュールでございます。もうお寝やすみ下さいませ」

禿頭の背の高い老人が背後のシートから身を乗りだし、耳打ちによって奏上申し上げる。

「少しは体をおいといたただかねば」

ルナ姫は精神集中を妨げられ、跳びあがるような反応を示した。大仰なようだが、心臓が爆発せんばかりのショックを受けたのだ。トランス状態からきわめて手荒に引き戻されると、おおかたの霊能者は異常なショック症状とりこの虜こになる。

それをいくら言葉を尽して説明しても、頑迷固陋がんめいころうの年寄りには決して理解することがない。斧おのを振るうような乱暴さで無理やり、ルナ姫を現実に引き戻そうとするのだった。

なによりも信心深い年寄りには、ルナ姫の奇矯ききょうな水晶球いじりが、神への冒瀆ぼうとく同様にかがわしいものと信じ、王女の救国的献身行為を妨害してはばからないのであった。

「わかつています。そう何度もうり返しいわずともよい」

ルナ姫は激しい心臓の乱調を鎮めようと深呼吸を重ねたあげく、ひどく不機嫌に呟つぶやいた。高齢の老人にいう言葉ではないとわかつてはいるが、怒りを抑えるのは無理というものだった。こんなわからず屋がお目付役づらしてついてまわるのだから、ルナ姫の任務遂行は楽ではなかった。押しつけの忠義を振りまわし、一事が万事、わがもの顔でルナ姫の行動に掣肘せいちゅうを加え、邪魔しぬくのだった。

「わたくしはもう子供ではない。自分のなすべきことはよくわかっています。わたくしがなすのは、すべて必要だから、なさねばならないからです。口出しは控えなさい」

ルナの怒りを秘めた口調に対し、禿頭のキリギリスは鈍感そのものだった。

「お言葉ですが、プリンセス。このレム侍従はもつたいたなくも国王陛下よりプリンセスの大切なお体をおあずかりした身……」

老人は不服げに反論してきた。

「お体をおいといたただきたいという願いは全臣民の思い

を同じくしておりますところ。お聞き届けいただけねば、たとえプリンセスのご不興を招くことになるうとも、敢えて諫言かんげんするのが私の義務でありますれば……」

「もうよい」

ルナ姫はうんざりして忠臣気取りの老人の言葉をさえぎった。苛立ちいらだがあらわになるのをどうにも自制できない。

「あなたの諫言通り寝むことにします。スチュワードスにブランデーをもらって下さい」

家臣がいる限り、ルナは頭越しに飲み物を注文することもできないのだった。くだらぬしきたりだが、トランシルヴァニア王国はサイズは小さくとも格式だけは恐ろしく高く、ルナはその王女なのだから、やむを得ない。

「ブランデーですと？ とんでもないこと、人目もございます。あたためたミルクを持ってこさせましょう」

ルナ姫のかんしゃくは炸裂さくれつ寸前だった。

「わたくしはブランデーがほしいといっただのです。ミルクなどに用はありません！」

「なりません。ミルクになされませ」

「ブランデーを」

「プリンセス、駄々だだをこねるのもいい加減になされませ」

老人は恐ろしく厳格な顔で、んとしていい張った。ルナ姫の軽い気まぐれも許さないのが、よりによって随行者としてついてきたのだった。相手が姫君とはいえ、わずかな自由も認めない気だ。

「もうよい。もうなにも要らぬ。わたくしは寝みます」

ルナ姫は血が逆流し、体が慄^{ふる}えるのを懸命に制御しなければならなかった。国家経済を一身に負って健^{けな}気に奔走している姫君は、ほんのわずかな気まぐれも許されないといいのだった。若い身空で私的な楽しみを全て放棄し、献身している彼女を、頑迷な老人は手の焼けるわがまま姫君としか思っていないのである。

人生のなにもかもがうとましく、腐臭を放ちだすのは、愚^{ぐまい}昧な目付役の度を越えた干渉を受ける時であった。しかも相手は大切な姫君に忠誠の限りを尽している気なのだから救われなかった。ルナ姫が不快を示せば、ひどい仕打ちを受けたと本気で信じこむ手合なのだ。

ルナ姫が現実逃避を行ない、己れの霊能の世界に孤立しがちなのは、もっぱら旧弊固陋なこうした連中の無理解が追いこむのだといえただろう。

老人の目配せを受けて、近づいてきたスチュワードスが、ルナ姫の膝にそつと毛布を拵げようとした。ルナはもはやなんの反応も示さなかった。彼女の意識はすでに世界を異にしていたからである。

もつともスチュワードスは、その無反応ぶりを貴人の人もなげなマナーと解したかもしれない。他人のサービスは当然のこととして受け容れるのだ、と。

もちろん、そうではない。ルナ姫は一度夢想の中へ入りこんでしまえば、周囲にだれがいようと識別できなくなっ

てしまうのである。

「いったい何が起きるのか……」

ルナ姫の心を占有している思念が凝結し、独り言と化して我知らず唇を漏れ出た。

「はい？ プリンセス……」

と、毛布を拵げたまま大柄なヤンキー・ガールのスチュワードスが誤解して答えた、これに対する問いかけと感違いしても無理はなかった。

「なにをお望みでございますか、プリンセス？」

スチュワードスは、ルナ姫が膝に置いた水晶球が邪魔になつて、毛布をかけることができずにいた。

ルナ姫はまたしても意識を呼び戻され、茫然とスチュワードスを見返した。精神集中時を妨げられると、軽度の記憶喪失アマネジアに似た状態に陥おちこんでしまうのだ。

「毛布をおかけいたしましたでしょうか、プリンセス？」

スチュワードスはあわてていった。なにかしら大きな失態を犯した自覚に捉われていた。自分はこの高貴な女予言者の神聖な精神集中を乱してしまつたらしい。

「ノー・サンキュー」

と、ルナ姫は辛うじて硬こわばった舌根を動かした。一秒も早く途絶した思念の糸をつなぎ合わせねばならなかった。

「失礼いたしました……」

スチュワードスは顔を赤らめて立ち去った。彼女はこの稀き代たいの美貌の女予言者に大きな関心を抱いていた。占星術

ミスディック
 や占 いなど神秘的なジャンルが趣味なのだ。ルナ姫を乗客に迎えて張り切ったのはいいが、うまく話しかけるチャンスがなかった。夢想家タイプのルナ姫は報道の虚像とは異り、およそ社会的ではなく、己れの思念の内に閉じこもり、ほとんど口をきこうとはしなかったからである。神秘ファンのスチュワードスは他にも幾人かいて、等しく失望を味わっていた。

もつとも、ルナ姫のような高貴な乗客に対して気軽に話しかけることは許されないのだった。

スチュワードスが倉皇そらうとして立ち去ると、ルナ姫は再び、精神統一を計り、潜在意識の深海へ探索の手を伸ばしにかかった。

何事かが起こるのだ。このジェット・ライナーに乗っているうちに、何かが……

それは確信に等しかった。

それは輪郭だけ残存しており、内容が完全に失われている、あの夜の夢の記憶につながっていた。おびただしい寝汗に濡れそぼり、歯の根が合わぬ悪寒おかんに慄えながら、跳ね起きたあの夢……

体中がたつた今まで氷河の中に埋められていたように冷えきり、恐慌の余波が、寝室の闇の中に今もなお荒れ狂っていた。

王宮の寝所の天蓋付の寝台に半身を起こし、狂ったよう

に荒々しく鼓動する胸を両手で抑え、ルナ姫は汗まみれの顔に、追い詰められた小動物のような目をぎらぎら光らせていたのだった。

だが、どうしても内容を思いたせないのだ。手を伸ばせばあっけなく届きそうなのに、一度目覚めてしまうと、どうしても思いたせないあの夜の夢。

彼女はそれ自分が自分にとって、常に親しい予知夢であることを知っていた。だが、それはこれまで無数に訪れた予知夢の群れとは比べようもなく重要であり、ほとんど運命的な重みを持っていた。

その夢こそ、ルナ姫をうながし、訪米の旅へと出発させたものであった。米国の石油業者の大富豪にこれまで何度となく招待を受け、謝絶してきた彼女の決心を変えさせた、衝撃的な夢なのだ。

ルナ姫には明確な予感があった。この旅の途上で非常に重要な、運命的な変化が生じるだろう。それは、彼女個人の運命をはるかに超える巨大な変動のスタートとなるだろう。それが起きた時、ルナ姫はあの夢の内容を全て想い出すことができるだろう。

ルナは水晶球凝視によって更に潜在意識の深みへ降下して行った。時空間を超え、あの夜の夢に戻って行くのだ。ルナ姫はすでに、夜間飛行のジェット・ライナーのシートの中にいなかった。トランシルヴァニアの城の、寝室に回帰していた。巨きな天蓋付の寝台の上に横たわっている。

寝室は闇に満たされているが、ルナ姫には苦にもならない。透視能力が働きだしているからだ。それは、まぶた瞼を閉じていても、なにもかもがはつきり見えてしまう。寝室の隅々まで明確に見てとれる。真の暗闇であるにもかかわらず、透視という超能力は光を必要としないためなのだ。

ルナ姫は、精神を集中し、半覚醒状態に移行して行く。トランスに入り、予知夢の展開する世界をのぞきこもうとしている。

突如、意識に強烈な衝撃があった。

それは真赤な閃光せんこうとなって水晶球を粉碎し、全世界を引き裂き、血の色に染めあげた。

凶器で頭部を強打され、致命傷を負ったとしても、この物凄いショックの前にはなにほどのこともなかったであろう。

ルナ姫は呼吸を停止させ、永劫えいじゅうにも等しい恐慌と惑乱に押し潰された。

次の瞬間、ルナは鋭い叫び声を胸郭の深みから迸ほとばしらせ、弾けるようにシートから跳びあがった。無数の細片に砕け散り剥離はくりした水晶球のかけらが機内に飛散した。キラキラと光りながら、空中に噴き上りファースト・クラスの乗客席一面に降り注ぐ。

まったくなんの理由もなく、傷一つ一点の曇りもなく磨きあげられた精緻せいちな水晶球が炸裂したのだった！

水晶球の内部に閉じこめられていたかのように、一切の

記憶が雪崩なだれを打ってルナ姫の前を通過して行く。

ルナ姫の異様な叫び声は、乗客席をいたく驚かすに足るものであった。乗客たちの眠りを唐突に中断させ、覚醒に引き戻した。

シヨツクを受け、あるいは呆然ぼうぜんとした乗客たちの視線が、棒立ちになり凍りついているルナ姫に集まった。

ルナ姫の顔は紙よりも蒼白そうはくだった。異常に大きくなった瞳は、ぎらぎらと凍こてついた光を放はつていた。

ルナ姫が眼前まへにしているのは、現実と化した予知夢の世界にほかならなかつた。

化石となったルナを見返す乗客席の顔という顔は全て、死人の顔と化かしていた！

一人残らず、不気味な死の仮面をルナに向けていたのだつた。

それは未来透視だ。ルナ姫は乗客たちの顔に不可避の運命を見たのであった。目に映うつずるものの一切が、この世のものならぬ恐ろしい光景を現出させていた。

「プリンセス、どうなされました……」

遠い虚ろな声音が響いてきた。振り返ると、緑色にぶよぶよにふくれあがり、目鼻立ちも崩れて定かならぬ、しかし口やかましい随行者とわかる無気味な死人が彼女を覗のぞきこんでいた。海草のように見るかげもなくズタズタに裂けているのは衣服だけではない。

五体の形を満足に残さぬ、グロテスクに破壊された水死

体であつた。長らく海中を漂い、ぼろぼろに崩れた肉体の残骸だ。^{ざんがい}

そして、スチュワードスの制服と辛うじてわかる布きれを付着させた女の死体が、水幽霊の形相で漂い流れてきた。顔面はそげて半分しか残っておらず、四肢は左足一本だけを留めてちぎれてしまっている。周囲には人々のむごたらしい破壊された遺骸が散乱し、ゆらゆらと水流に揺れている。

「寄らないで！」

ルナ姫は堪まりかねて悲鳴を迸らせた。両手で顔を覆い、熱病に冒されたように激しく悪寒に慄えた。真実がようやく意識に浸透してきたのである。

無気味にゆらめきながら、ルナを凝視している水幽霊たちに向かって、彼女は泣き声をあげた。

「みんな、もうじき死ぬわ！ わたしにはそれが見える。

みんなの運命がはつきりと見えるわ！ 一人残らず海に沈み、藻屑^{もくず}になつてしまふのよ……」

「しつかりとなされませ」

と、随行の老人の水死体が遠い声でいった。

「プリンセスは気が高ぶっておられる。プリンセスに暖めたミルクを持ってきてくださらんか」

「かしこまりました……」

と、スチュワードスの恐ろしい水幽霊が虚ろな^{こたま}訝のように答える。

ルナ姫の目にはもはやすさまじい変貌を示す現実しか映らなかつた。秩序あるものはなに一つとどめていない。

機体の残存部は、燐光を放つ濃密な海水に満たされていた。海面に激突するまでに空中分解を遂げたのだろう。機体はきれいに飛散し、まとまりを持つ形状を残してはいない。

スチユワーデスの正視に耐えられぬ遺体が再び漂い流れてくる。

ルナ姫は、それが老人に命じられてミルクを運んでくるスチユワーデスの姿だと判別する理性の力を振るい起こそうと死にも狂いで努めた。

視野に映じているのは、現実ではない。いまだ現実と重なりあっていない未来の光景である。ルナ姫の超常感覚は未来の時制に先行している。これほど物凄い未来透視はまたと味わったことがなかつた。この非・現実が、現実によがてびつたりと重なりあう時がやってくる……

「驚いたね。なにごとが起きたのかと思ったよ。プリンセスらしからぬ悲鳴だ……」

「プリンセスは寝ぼける癖があるみたい」

と、近くの乗客席でアメリカ人の夫婦者がささやきあうのが轟音ごうおんのようにルナ姫の聴覚をたたいた。

「このジェットが落ちるんじゃないかと一瞬思ったよ、ハニー」

夫が声を殺している。ファースト・クラスの乗客たちは

シヨックの表情を隠さず、シートから伸び上るようにして、ルナ姫を眺めようと試みていた。何事が起こったのかわからないままなので、不安を覚えているのだった。

ミルクを運んでくるスチュワードスのほかに、同僚のスチュワードスたちが、棒立ちになっているルナ姫に急ぎ足で向ってきた。

炸裂した水晶球はファースト・クラスのほぼ全客席に、広範囲に渡り、微細な剥片をばらまいたのだ。

ルナ姫は両手で顔を覆った。物凄いエネルギーの奔流の急接近が、彼女の超常感覚に触れたのだ。むろん、常人にはいかなる感覚器官にも捕捉できぬ、無形無音のエネルギー流の波動だった。

しかし、ルナ姫にとっては、巨大な砲弾が大気を裂いて飛来してくるのと同じだったのだ。凶暴な波動が前触れとして、熊蜂の襲撃のようにルナ姫に肉迫した。

ルナ姫の喉のどの深奥から、絶叫が迸り出てきた。とどめようもない恐怖の悲鳴だった。何事が起こるのか、今こそはつきりと悟ったのだ。死物狂いで急迫したそれを拒否しようとルナ姫は頭を振り、狂ったように鋭い叫び声を放った。その叫び声が意味するものを悟って、全乗客、急行してくるスチュワードスたちがいつせいに氷結してしまった。

「ジェットが……ジェットが落ちる！」

絶叫が続くうちに、機体に貫き走った激動が鋭利な刃物で切り落したように、ルナ姫の叫びを断ち切った。

通路に立往生したスチュワーデスの手から、ミルクの力
ツプがふわりと放れ、宙に浮いた。DC 8の機体が名状
しがたい無気味な呻き声うめをあげたのだ。

ねじ曲わいぎよくった空間にジェット・ライナーが突入し、全機体
が歪曲わいぎよくしたようであった。

ジェット・ライナー操縦席コクピットの全計測器は瞬時に狂乱状態
に陥った。が、操縦士たちが恐慌に陥る暇は残されてい
なかったのだ。

想像を絶したエネルギー力場の渦動に呑のまれて、DC
8の全機体の機構が末端のボルトの一本に至るまで、いつ
せいに歪曲したのである。

マイクロ・セコンドでDC 8の機体はねじれ、あつけ
なく弾け飛んだ。翼がジェット・エンジンもろとも吹っ飛
び、ばらばらに裂けちぎれる。

DC 8は壮絶な空中分解を遂げた。夜の虚空でぱつく
りと割れた。ちぎれとんだジェット・エンジンの巨大な推
力が、ついでに機体を引き裂いていったのだ。

機体は幾つかの部分に割れて飛び散り、乗客たちの肉体
はちぎれて、虚空にばらまかれた。空間は無数の雑多な破
片が唸うなり飛ぶ死の狂乱の場と化した。

空中に炎の巨大な輪が花開く。

あまりにも凄惨せいさんな滅びの光景であった。もちろん、だれ
一人としてこの大惨事を目撃すべく生命をとどめている者
がありうべきはなかった……

いや、そうではない。ルナ姫だけが明確にこの凄絶をきわめた死の印象を脳裡に刻みつけていた。それは現実と非・現実が寸分の狂いもなくぴったり重なりあつた瞬間であつた。

ルナ姫は己れの体が、見えざる巨大な手に掴つかまれ、虚空に引きずりだされるのを意識していた。

猛速度で空間を乱れ飛ぶ、ジェットの機体の破片がルナ姫の軟い肉体を傷つけなかつたのは奇蹟だ。鋭い破片がわずかに接触しただけで人間の肉体は分断されてしまうからだ。

そして、ルナ姫の体は狂風の中に投げだされ、凄い速さできりきりと回転しつつ落ちて行く。

地上一万メートルの高空からの落下だ。ルナ姫が意識をとどめているのが不思議であつた。空中分解のシヨックで、全ての者の意識がフューズが飛んだようにブラック・アウトしてしまつたからだ。

轟々と狂風がルナ姫の耳許で咆えほ猛りたけ、暗い地上と鮮明な星空が急速に回転している。

そうだ！ やつと思ひだした！

ルナ姫は恐慌にも優る感動をもつて、取り戻した記憶を握りしめた。

この夢だつたのだ！ 目がさめると、どうしても思ひだせなかつたこの夢！

すると、ルナ姫の意識は自動的に過去の世界へ舞い戻つ

て行った。トランシルヴァニアの城の、夜の寝室で叫び声とともに跳ね起きた。天蓋付の寝台の上に、冷汗にまみれ、悪夢から脱出した余波で息を切らし喘いでいるルナ姫に戻った。

パリのブティックで買ったネグリジェを寝汗で重くしめらせてしまい、脱ぎ捨てて若い肉体をむきだしに、とめどもなく嘔きだしてくる気味悪い汗を流しているルナ姫になった。

予知夢である！

彼女は訪米の旅がこのように無残な結末を迎えることをちゃんと知っていたのだ。搭乗したジェット・ライナーが奇怪な遭難に巻きこまれ、夜の大西洋に散りしだくことをなぜ、予知夢を思いだすことによつて、悲惨な航空機事故を回避できなかったのだろう。思いだしてさえいれば、百人以上の人々の生命を救うことができたのに……

ルナ姫は悔恨にさいなまれた。ジェット・ライナーのコースにわずかな変更を加えただけで人々はみな助かったはずなのに。

いや、そうではなかった。彼女は事故発生を探知し、警告を発したのだが、すでに手遅れだったのだ。しかし、もつと条理の通った説明ができたなら……

ルナ姫が悔恨に心をゆだねているうちに、なにかしら変化が生じていた。彼女の肉体はもはや虚空の落下をやめていた。

全様相が、完全な変貌を遂げていたのだ。ルナ姫の足許の側にある星空は、もはや地球上から仰ぎ見る星辰ではなかった。足許どころか頭上にも、前後左右にも、あらゆる方向が凄まじい濃厚さを持つ星群で埋め尽されていた。

ルナ姫がこれまでに見たこともない猛烈な星の密集があった。これは宇宙空間である。宇宙の全てが多彩な光に充滿していた。

だが、上下左右のない虚空に宙吊りになっていながら、ルナ姫は絶対真空も絶対零度の寒冷も感じる事がなかった。

微妙な波動が満ちている宇宙空間には、平穏さと静謐さがあつた。

これはどうした事か……

ルナ姫の心は疑った。もしかすると、自分はすでに死んでしまったのではないだろうか。肉体の死によって、精神だけの存在……幽霊になったのではないか。

呼吸すべき大気もなく極寒の宇宙空間で、こうして存在すること自体、ありうべきことではない。すると、ここはまさしく死後の世界……

ルナ姫は突如、堪えがたい孤独感の虜になった。たまらない寂しさとともに、冷寒が浸透してきた。ルナ姫は胎児の姿勢で体をまるめ、寒さから身を護ろうとし、歯の根も合わず慄えた。

ルナ姫よ、あなたはまだ死んではない

不意に言葉が生れた。いや、言葉ではなく意識の表層に
わきあがった想念の閃ひらめきであった。

あなたは精神のみの存在として、この宇宙空間に招かれ
たのだ、ルナ姫よ

その想念は独特の力強さ、重厚さに満ちており、自己の
想念とは歴然と区別されるものであった。

明るい光の波動が意識を暖めにかかり、ルナは孤絶の苦
しみから解放された。

「あなたはどなた……？」

光の波動である明るい想念は、ルナにとって慰謝であり、
平安そのものを意味するものであった。その精妙な意識が、
ルナ姫の意識とまじわるにつれて、ルナは落ち着きを取り戻
し、気が楽になり、幸福感さえ味わいはじめた。

記憶が甦よみがえり、ルナは幼少時より自分がこうして精神だ
けの存在として肉体を脱けだす、アストラル・プロジェクトン「星 体 放 射」ア「離
脱」と呼ばれる奇異な経験をくり返してきたことを思いだ
した。

何も心配は要らなかった。肉体と精神体は白銀色の輝く
コードで結ばれており、空間的にいかに遠く離れようとも
無限に伸展し、跡切れることは決してないのだ。

アストラル・ボディ精神 体としてのルナ姫は、現実の肉体同様歩くこと
もできるが、ユニークなのは自由自在に空中浮揚し、凄
速さで飛行することもできるのだった。

扉や壁など堅固な障害も、苦もなく突き抜けて行くこと

が可能であった。精神存在である時のルナ姫にとって、いかなる物質も障害物となることはなかったのだ。

アストラル・ボディと化したルナ姫は、一瞬にして地球の裏側まで移動し、見知らぬ国々を訪問することができた。それらの見聞は、ルナ姫だけの心に秘めた経験であった。そんなことを口外すれば、精神異常者を見る目が返ってくるだけだと、ルナ姫は賢明にも沈黙を守るすべを知っていたからである。

それと同じことが今、起こっているのだった。ただし、もっと巨大な規模で。

ルナ姫よ、見るがよい。あなたの地球が属する島宇宙、銀河系星雲は、一塊の光る雲となって浮いている。あなたが今いるところは、その銀河系より三八〇万光年へだてた宇宙空間なのだ

明るく光る精妙な意識がルナ姫に告げる。

「三八〇万光年……」

その巨大な天文学の距離は、ルナ姫の実感とは同程度の隔りを持つていた。だが、銀河 天の河として夜空にかかる星の集団を、ひとひらの雲に似た小さな渦状星雲として、確認することは、彼女にとっても衝撃的であった。

自分はあまりにも遠くまで来てしまった、とルナ姫は悔恨をこめて考えた。きつと帰りつくのは容易なことではないだろう……

「でも、どうしてわたくしがこんなところに……?」

ルナ姫よ、あなたの精神は光も及ばぬ速さで大宇宙を一挙に跳躍したのだ。あなたの精神と分離した肉体は地球上にあり破壊されたジェット・ライナーから投げだされ、夜の大西洋に向って落下しつつある

「わけがわからないわ……あなたはどなたですか？ どこにいて、どのようにして私と話をしているのですか？」
ルナ姫は困惑の極に達していた。なにもかもが彼女の理解を超絶していた。

われわれは今、直接意識を通じて思念を交換している。テレパシーといえはあなたには理解しやすいだらう。われわれのコンタクトは言語を介在させずになされている。私がかどこにいるかという問いに答えるのはいささかむずかしい。なぜなら私は意識エネルギー体だからである。それゆえ、空間の特定の座標を占めているわけではない。

私の意識はルナ姫よ、あなたの意識の周囲に広がり、内部に包みこんでいる。いいかえれば、私はあなたの意識を呼び寄せ、私自身の意識の内に組み込んだのだ。あなたはバリヤーによって完全に保護されているゆえに、恐れる必要はない。いかなる邪悪で危険な存在も、あなたを傷つけることはできない

「こんなこと、とても信じられない。わたしはきっと夢を見ているんだわ……あの、目が覚めるとどうしても思いだせなかった夢の中に閉じこめられている……」

これは決して夢ではない。意識体にとって時空間はなん

の意味もない。三八〇万光年の宇宙の深淵しんえんをあなたの意識が超えるのに、わずか一秒の時間すらも必要ではなかった。私に対して心を開きなさい、ルナ姫よ。さすればあなたは多くのことを知るであろう

ルナ姫は勧められる通り、自分の意識を開いた。心地よい光と暖かさが増加し、それとともに力強いエネルギーがどつと流入してくるのが感じられた。それは一滴の水が大海に流れこみ、広大な共生感を所有するようなものだった。「本当だわ！ あなたは嘘うそをいつていたのではないのですね。あなたの意味することが、なぜかとても素直に理解できます。あなたはもしや、神と呼ばれる方ではないのでしょうか……」

ルナ姫は畏敬いけいに捉えられて、己れを包みこむ巨大なエネルギー体の全容を推し計ろうとした。だが、物質宇宙のみならず、高次元宇宙全体に広がっている神の如き広大な意識は果てしがないようであった。上方を仰ぐほど、その威容に目くらめき圧倒された。それは宇宙全体を推し計ろうとする試みに似ていた。あまりにも複雑精妙であり、無限の情報の海であった。

私は神ではない。あなたがた人類が神と呼ぶ、創造主、大宇宙意識体ではないが、あなたがたと特に密接なエネルギーのつながりを持つ個性を備えた宇宙意識体というおうか。しかし神ではありえない。私の名はかりそめに「フロイ」と呼ぶがいい。あなたの種族の言葉で「白金しろがねの光」という

意味になる。ルナ姫よ、私は宇宙意志の要請により、あなたを地球人類の代表として選び、ここに招いた。それは宇宙の真実の姿をあなたに見せ、重要なメッセージを託すためにほかならない。

ルナ姫よ、あなたは私の意識のパイプを通じて、真実を知るであろう

恐ろしい密度のおびただしい情報がルナ姫の意識によって走査されていた。時間感覚はそこに存在しなかった。異様に圧縮された、数百億年の宇宙史が一瞬にして展開されたのだ。

ルナ姫の意識は、そのあまりにも膨大な情報をとつてい処理しえず、おぼろげな輪郭を捕捉するに止まった。彼女の貧しく閉ざされた地球人女性の意識では、それが限界であった。ルナ姫があまりの驚異に圧倒されていなければ、その関心のおもむくところにより、好きなだけの真実を掴みとることができたであろう。後でいかに悔んでも取り返しのつかない過誤とルナ姫は信じるようになったのだ。言語を超えた方法で、“フロイ”がルナ姫に物語ったのは、宇宙全域に渡る大戦乱の歴史であった。

数百億年もの間、跡切れることなく続いている“幻魔”軍団と“大連盟”の超大規模の戦闘を、ルナ姫は一瞬にして展望した。

大宇宙のあらゆる空域において、戦さは激化する一途をたどっているが、もはや自分たちがなんのために戦うのか、

その理由を知るものはほとんど皆無といえる

“フロイ”の物語の輪郭をルナ姫が言語に置換した内容はこのようなものであった。実際は、“フロイ”がその意識の内に投射する現実そのものが異様な密度で凝集しており、無限に語句を連ねても、全容を捉えることはまったく不可能であった。ほんの個人的な人生ですら、全てを言葉に置換するなど、とうていできようはずがないのだ。

あまりにも長きにわたる戦乱のゆえに、戦いの理由さえ忘れ去られてしまったようである。敵味方、双方ともただひたすら敵を徹底的に滅尽すべく、激烈な戦いを続けている。超古代の神話に痕跡を残す戦乱が、今もなお戦われているのだ。

わずかこの十億年の間に、いったい幾つの星雲、島宇宙があとかたもなく消滅し去ったことだろう。

ルナ姫よ、見るがよい。私の意識に組み込まれており制御下にあるあの渦状星雲も、いまや消え行くこうとしている。あの無残にむしばまれた星雲を目にとめるがよい

ルナは“フロイ”の意識の誘導に従い、彼女自身の属する銀河系宇宙と一卵性双生児のように酷似しているレンズ状の渦状星雲を視野におさめた。

それは、美しい外縁部から中心部に向って、醜悪な虫食い穴のような侵蝕が広がっていた。

その渦状星雲が病毒にむしばまれ、致命的に病んでいるという印象は強烈そのものであり、致死期の重病人を目の

あたりにしたように、ルナ姫は息を吞^のまずにはいられなかった。

そうだ、この星雲は病んでいる

と、「フロイ」はルナ姫の直感の正しさを証^{あか}した。

これは、あなたがた地球人類がメシエ31、アンドロメダ星雲と呼んでいる島宇宙の一つである。あなたがたには知るすべもないが、この島宇宙はもはや救いようもなく、滅びの道を急速に滑り落ちつつある。残された命運はいくばくもない。よく見ておくがよい。そのために私はあなたを惨害のただ中へと導こう

時間経過はただの一秒たりともなかった。ルナ姫の意識は次の瞬間、アンドロメダとして知られる星の大集団の中へ移動を遂げていた。

「ああ、星が消えて行く！」

ルナ姫は思わず絞りだすような嘆声を漏らしていた。

「星がみるみる消えて行ってしまっ！」

それはルナ姫が一度も経験したことのない、魂の深奥へと響きわたる、深甚なショックであった。

ルナ姫を全方向から取り囲む、輝きわたる星の大集団に急速な異変が生じているのである。

密集する星で埋めつくされた大天球を、暗黒が驚くべき速度で蚕食し、「虚無」が拡大しつつあるのだ。

「フロイ」の意識下の圧縮されたタイム・スケールで見せられているのだと気付いてもなお、心が恐ろしさに凍りつ

いた。

超巨大なクリーナーの吸口が星の大集団の中にさしこまれたように、星群がごそり、ごそりと欠落し、消滅して行く。

それは凄まじい光景である。ルナ姫は魂のみ味わう冷寒に慄えた。

星々の輝きを失った宇宙空間は、真の“虚無”そのものであった。そこでは宇宙を律する法則にはずれた、真の意味での異変が進行中であった。

長期間にわたる激戦は、一千億の恒星系の半ば以上をすでに消滅させてしまった。やがては長くを待つことなく、全ての星系があとかたもなく消滅してしまうであろう。一度破れた宇宙的均衡は、地滑りのようにどこまでも波及し、星々を掃くように滅尽させて行く。全き破滅が到来するまで、それはやむことを知らない。一つの島宇宙全体の死だ

ルナ姫は息を呑んでいた。“フロイ”の垣間かいま見せる島宇宙の凄絶な死に圧倒されてしまったのだ。そのために、いったいどれだけの生命体が、星間種族が死滅して行くことだろう。

ルナ姫は全感覚が麻痺するほどの衝撃を受けていた。滅尽されて行く生命体の尽きぬ怨みうらみ、嘆き、絶望、恐怖、苦痛の絶叫が、巨大な波濤はとうとなって大宇宙に拡がって行くさまを衝撃の中で垣間見た。

この無限の光彩に満ちた美しい大宇宙で展開される最大級の地獄図絵であった。

この宇宙規模でのジェノサイドを招き寄せたのは、“大連盟”の非力さも大いにあずかっている。“幻魔”の侵攻軍はそれにひきかえあまりに強大であり、“大連盟”はその電光石火の侵攻の前になすすべもなく、脆弱さ、軍紀の緩み、臆病、内部抗争、日和見、裏切りなど、ありとあらゆる弱点をむきだしにして敗れ去った。彼らは星間種族エゴイズム、星間国家エゴイズム、宗教抗争などに浮身をやつしすぎ、結束するすべを遂に学ぶ暇がなかった。それに引き比べ“幻魔”はきたえあげられたはがねの大槍のように精強そのものであり“大連盟”の神経中枢を、脆弱な肥大した肉体を造作なく突き刺し、なんの抵抗感もなくえぐり、致命傷を負わせることができた

“フロイ”は事実のみを淡々と述べた。それは遠い過去に去った歴史を語る口調に似ていた。悼みや悲しみは意識の深みに沈み、遠い訝のように響いているのみだった。

だが、ルナは“フロイ”の意識から伝わる滅亡する星間生命体の阿鼻叫喚の凄絶さ、計り知れぬ重さによって、“フロイ”の心を感じとることができた。

「“幻魔”とはなんなのですか？」

“幻魔”とは大宇宙の破壊者だ。彼らは全ての星々を滅尽するまでは、決して戦いをやめようとはしないだろう。戦乱は無限の過去の彼方から続いている。宇宙の全域にわ

たり、「幻魔」はすでに数億、数十億の島宇宙をあとかたもなく消去してしまった

「でも、なぜそのようなことを？」

「幻魔」は破壊のための破壊をのみめざし、純粹な破壊者として生きる、凶暴なエネルギー生命なのだ。「幻魔」は星屑一つ残さず宇宙をクリーナーの如く掃いてしまう。後に残るのはなにもない。「虚無」だけがそこにある。「幻魔」はこの大宇宙が存在する以前から存在するといわれる。彼らの軍勢は比類なく強大であり、彼らの駆使する「魔力」は恐るべきエネルギー・レベルにある。それは燃えさかる恒星を吹き消すといわれているとおりだ。

いかな星間種族の産みだす超科学による超兵器も「幻魔」の前には玩具同然に無力という。

「幻魔」に対抗すべくには、負エネルギーである彼らに対し、正のエネルギーである超常能力を結集することにより、打ち消してしまわねばならない。だが、これまでにそれだけの強大な正エネルギーを結集させた例はほとんどない：それがために、アンドロメダ星雲における「大連盟」は完膚なきまでに叩き潰され、敗北しなければならなかった。ルナ姫よ。あなたの属する銀河系宇宙にもすでに「幻魔」の侵攻が開始されて久しい。間もなく、あなたの母星である地球にも「幻魔」は悲惨な戦乱を巻き起こす。その時、あなたがたも戦わねばならないのだ

「わたくしにどうしろというのですか?! わたくしはつま

らない平凡な女にすぎません。とうていそのような力はないし、務まりようのない大役です」

ルナ姫は愕然としながら抗議した。

戦うのだ、ルナ姫よ。地球全体の運命はあなたの掌中にある。あなたは正のエネルギーを結集させる核とならねばならぬ。それがあなたの負う役割なのだ

「とんでもありません。それはイエス・キリストのように偉大な救世主^{メシヤ}に課せられる大任ではありませんか！ わたくし如き卑小な者に、そのようなことをいわれても困りません……わたくしは辞退します。大任にふさわしい偉大な真の救世主^{メシヤ}をわたくしの代りに選んでください」

ルナ姫は必死で懇願した。なんとかして逃避したいという思いで頭の中が充満し、火のように燃えた。ほとんどそれはパニックに近い逃避願望であった。

戦う以外に、あなたがたが生き伸びる望みはない。ルナ姫よ、あなたがたには希望があり、愛と友情の連帯がある。至上至高の価値を求める心がある。それは正のエネルギーであり、集結することによって、唯一、“幻魔”を打ち破る“力”となるものだ。その心がある限り、無敵と思われる“幻魔”すら、敗退するであろう。

“真の救世主”とは、その無限の正のエネルギーを全宇宙に充満させる存在をいうのだ。ルナ姫よ、私はあなたを“幻魔”の支配下にある世界へ導き、彼らの正体を見せよう

「いやです！」

ルナ姫は声を限りにして絶叫した。死にもの狂いで拒否し、懊惱おうれうに身悶みもたえした。

しかし、必死の拒否の叫びも手遅れであった。ルナの意識は再び光速を超える速さで移動していた。瞬時にスライドを切り換えて行くように、初め微細な宇宙塵しんと見えた、浮遊物のベルトが拡大された。

それは地球人の概念をはるかに超える、超巨大サイズの人工物体　宇宙機の破片・残骸にほかならなかった。

破片とはいえ、地球上の最大級のピラミッドの何十倍も巨大なのだ。原形はおそらく山脈に等しい威容を誇っていたに相違なかった。

すでに遠い昔に死滅した宇宙の古戦場の遺跡であった。ルナ姫の意識は速度を緩めて、浮遊物となって宇宙を漂っている残骸の群れのただ中に分け入った。

生命の徴しはまったく感じられない。これほどおびただしい機体の破片の中に、遺体のかけら一つ浮遊してはいない。

ルナ姫の意識は直径数百キロにもわたって拡がっている塵のベルトの中を高速で駆けめぐる。

そして発見した最初にして最後の生命体が救命カプセルの内部で、二千年の長きにわたり不幸な夢の世界をさまよっている、異星のサイボーグ戦士の怪異な巨体であった。

身の丈は二メートルを超え、顔にはインディアンの戦士の戦いの隈取りくまどに酷似した印形が刻みこまれていた。ヒューマノイドであり、地球人との体形の差異は認められない。ルナ姫は畏怖いふを持って眠れる異星人の戦士の姿に見入った。地球人として、最初の異星人との邂逅かいこうであることはまったく意識になかった。

これはサイボーグ戦士、ベガだ。彼は連合軍機動部隊の司令官として“幻魔”に大会戦を挑み、不運な裏切りにあつて敗れ去つた。二百年を戦い続けて敗残の身となり、自死を選んだベガを私はこの世にとどめておいた。以来二千年の間、ベガは自己閉鎖した己れの意識界 夢の中をさまよい続けている。

苦痛に満ちた夢のくり返しの中で、ただ一つの慰謝は彼の他星人の恋人アリエータの面影だ。美しい超能力者の娘アリエータは、最後の大会戦が決定的な敗北に終つた時、戦死した。サイボーグの彼にとっての愛は、肉欲的な性愛ではなく、純粋な精神愛ではあつたが、愛する者を護れなかつた傷手はあまりに大きく、ベガは自己の裡に閉じこもつてしまった。

ルナ姫よ、あなたはベガの意識の世界に入り、彼を覚醒させ、再起させねばならない。あなたが彼を甦よみがへらせた時、彼はまたと得がたい忠勇な味方となるであろう

“フロイ”の誘導によつて、ルナ姫は怪異なサイボーグ戦士の自己閉鎖した意識世界に入りこんで行つた。

ベガの無限にくり返される想念は、暗く冷たく虚ろな筈のようであった。二千年の間、サイボーグ戦士ベガは悲愁の想いとともに、彼の人生の内部に閉じこめられてきたのだった。

アリエータ、アリエータ……君は死んでしまったのだな……私を残して、忘却の遠い彼方に去ってしまったのだな……孤独な戦場の明け暮れの中で、君だけが小さな灯だったのだが……君が去り、全てを失って敗残の身となった今、この広大な宇宙にありながら、求めるものとしてない。

長い長い戦いだっただ。あまりにも長すぎた。二百年の歲月が、このサイボーグの無感覚な体に触れようとせせぐ過ぎ去っていった。傷つきやすく、無常な肉体を持たぬ私にとつてすらも、その歲月はどうにもならぬ倦怠けんたいと疲労と無為の思いを蓄積するだけにすぎなかった……

私は疲れたよ、アリエータ。魂の深奥に疲労が巣食っており、そいつをなだめることもいやすることもできないのだ。私はなぜ君といっしょに死ねなかったのだろう……君と夢のない永劫の眠りを眠ることがなぜできなかったのだろう……

ベガは痛恨をこめて、意識をそれに向け、憎悪の叫びを投げつけた。だが、その憎しみすらも虚しく冷めて、鈍く赤く光っていた。

私を殺せ、“幻魔”よ。なぜ敗残兵の私を生かしておくのだ……なぜ魔界と化した宇宙に、私の存在をとどめてお

くのだ。もはや私の愛する者も、同胞も、友もすべてが消え失せた。私もこれ以上生をとどめておきたくない。私を殺せ、早く！ 運命の手にあやなされて、私が再び甦り、お前たちをうち滅ぼすことのないように

宇宙の端から端まで、とてつもない轟音とともに亀裂が走り抜けるようであった。ルナ姫は絶叫をあげた。狂った者のように金切り声で拒否の叫びを放ち続けた。

それは人間の想像を超えたものだった。宇宙と等身大の貪虐な肉食獣の裂けてねじ曲った口。宇宙の亀裂が凄まじく邪悪な笑みを浮かべるのを、ルナ姫は確かに見た。

そこに蓄積された“幻魔”の負エネルギーの龐大さは、あらゆる概念を覆すものであった。原初の宇宙よりも以前より存在するもの。それは完全な絶望、苦悩の深淵そのものであった。それに意識を向けているだけで、ルナ姫の精神の全ての安全装置はいっせいに吹き飛び、狂気の暗黒が襲うことを彼女は知った。

“フロイ”の意識エネルギーが彼女を包みこみ、バリアーとなつて、暗黒エネルギーの流入を阻止した。幾億もの雷鳴を集めたような、“幻魔”の投げつける“虚無の咆哮”が宇宙全体を震撼しんかんさせているようだった。

ルナ姫よ。私はサイボーグ戦士ベガを、あなたの地球へ送ろう

“フロイ”の想念が、宇宙の激動のさなか、信じがたい穏やかさでルナ姫に告げた。

あなたはベガを覚醒させ、説得を加えて、再び「幻魔」に抗して立ち上らせるのだ。愛だけが彼を敗残の苦悩から再起させるであろう。その時に彼はまたと得がたい助力者となることをあなたは知るであろう

再び宇宙の雷鳴が轟きわたり、ルナ姫はそれが「幻魔」大王 暗黒エネルギーの中枢から投げつけられる嘲笑ちやうしやうにほかならぬことを悟った。

「フロイ」の意識を通じて、「幻魔」の脅迫をこめたメッセージがルナ姫を打った。

「幻魔」大王は大宇宙の破壊者にして、それは永遠の支配者なるぞ

破壊的なエネルギー震動が、「フロイ」の意識に激突し、超新星の爆発のように燃えあがった。「フロイ」の白光のバリヤーが大きく揺いだ。宇宙空間を津波のようにおし渡り、行く手の全てのものを消滅させて行く。超絶の暗黒エネルギーの真向からの襲来に対して、屈することのない「フロイ」の偉大さを、ルナ姫は讃美せずにはいられなかった。

「幻魔」大王の咆哮が、恐ろしい衝撃波となって宇宙の深淵をどこまでも渡り続けた。

星よ消えよ！ 暗黒と虚無が全宇宙を支配するまで！ ルナ姫の意識は、宇宙津波の追撃を振り切って、跳躍した。閃光と化した意識は、再び大西洋上の虚空にあり、一万メートルの落下を続けているルナ姫自身の肉体に回帰し

ていた。

疾風がルナ姫の必死に呼吸しようとする空気を吹きちぎり、窒息させた。暗黒の虚空をどこまでも吸い込まれて行く。あまりにも巨大な経験が、苦痛や恐怖を圧倒しているゆえに、ルナ姫は己れの肉体がまさしく死地にあることさえ意識していなかった。

夢なのか、幻覚なのか。

ルナ姫の眼前がにわかには展^{ひら}げ、大群衆が出現したのだ。何万、何十万とも知れぬ彼らの顔は、なぜかルナ姫の親しく見知っている顔であった。実際に知っている顔ではない。だが、なぜか見慣れているという気がしてならないのだ。彼らの顔の表情が伝えてくる親密さ、友愛の波動は、ルナ姫と彼らが固いきずなで結ばれていることを証していた。

彼らはルナ姫の仲間であり、同志なのだ。大群衆は彼女に向って手を振り、笑いかけ、拍手を送っていた。ルナ姫は彼らに向って挨拶を送った。

轟音とまがう大歓声がルナ姫を押し包んだ。大きなレセプションでスピーチしたり、トランシルヴァニアの国民に向って話しかけたことはあるが、これだけの大群衆に対して挨拶を述べるのは初めてであった。

ルナ姫は、「フロイ」に招請を受けて地球より三八〇万年隔てた宇宙空間で見聞したことどもを、人々に報告しようとした。

一言ごとに大歓声がまき起こり、ルナ姫がいくら声を張

つてもかき消されてしまふほどだった。津波のように轟音と化して歓声が返ってくる。熱狂の大渦巻が生じていた。彼らはさながら「救世主^{メシヤ}」を迎える民衆のように興奮の頂点に達した。

ルナ姫は、自分が「救世主^{メシヤ}」でないことを人々に説明しようとしたが、もはや己れ自身の声さえ聞こえなかった。

「幻魔」の侵攻を伝えようとしても、轟音の津波にかき消された。大群衆は熱狂してルナ姫の許^{もと}へ続々と参集してくる。ルナ姫を盟主として仰ごうとしているのだった。

それは間違いだ、「フロイ」にも告げたように、自分は平凡なつまらない女にすぎない、とルナ姫は告げようとしたが、だれも耳を貸そうとはしなかった。

ルナ姫ははつと覚醒し、自分の肉体が高度一万メートルの高空から、暗黒の大西洋の深淵へと凄まじい風切り音を発して落下していく現実に気付いた。

群衆の歓呼と拍手の轟音は、大気を裂いて落下して行く己れ自身が発する、疾風の轟音に他ならなかったのだ！

改めて恐怖とともに、宇宙での邂逅の記憶が甦った。あの時彼女は「フロイ」の偉大な意識バリアーの裡に守護され、いかなる危険をも感じなかった。

「フロイ」がルナ姫を邂逅のために、宇宙に呼び寄せ、そして再び地球上へ戻したのであれば、「フロイ」は依然として彼女の肉体を守護するのではないか。

もし彼女がこの深夜の航空機事故によって死すべき運命

にあるならば、“フロイ”は彼女を招き寄せ、“任務”について悟らせるような手だては講じなかったに違いない。

ルナ姫は閃光のように一瞬の思念で論理を完成させ、不思議な安息を感じた。

“フロイ”は彼女を護るだろう。なにも心配はいらないのだった。

一万メートルの高度より、加速しながら大西洋に落下するならば、海面はコンクリート床の強度と、剛性を備え、人間の肉体はあとかたもなく炸裂する。

だが、すべての常識を裏切つて、ルナ姫は蝶が舞い降りるように優雅に大西洋に到達し、水煙をあげて着水すると沈んで行つた。深淵へと引きこまれて行つた。

強烈な水圧が重く体を絞めつけた。暗黒の深淵へどこまでも沈んで行く。肉体の死が迫ってくるのを感じた。

苦痛も、恐怖も依然として感じなかった。

暗い海中を巨大な流線形の影が高速で移動し、ルナ姫に向つてくるようであった。群れをなして接近してくる。

巨大な魚群の影だ。鮫のようにも思えた。だが、恐れ的气氛はなく、平穏な心のままルナ姫は待ち受けていた。

にわかには、周囲の海中が激しく渦巻いた。魚群がルナ姫の下方へ集合してきた。

イルカであった。イルカの大群がルナ姫めざして突進してきたのだ。

ルナ姫はベルベットのようになめらかなイルカの体の感触に

とり囲まれた。下方から圧力がかかり、ルナ姫の体はエレベーターに乗ったように押し上げられて行く。

ルナ姫は上昇を続け、海面上に押し出された。

頭上には再び満天の星空が広がった。ルナ姫は呆然と仰臥し、呼吸活動を再開していた。あれだけの高処から墜落したにもかかわらず、打撲傷一つなく、水さえも呑んでいない。着衣さえ海水に濡れこそしても、ほころび一つ生じていなかった。ルナ姫は不思議にも思わなかった。

“フロイ”は約束を守ったのである。偉大な力を振るう“フロイ”にとっては、なにほどのこともなかったのだらう。

ルナ姫は密集するイルカの大群が作る浮島の上にあつた。イルカたちはまるで予定された救助者のように、即座に救出に駆けつけてきたのである。

イルカたちは甲高い声で互いに喋りあっていた。自分たちの買って出た役目を無事に果たせたことを互いに喜びあっているように思えた。彼らの興奮した話し声は、あの幻覚の大群衆のざわめきそっくりであつた。

ルナ姫の体の下にあり、彼女を支えているイルカたちの友愛の情が明確に伝わってきた。彼らはルナ姫が好きでたまらないと訴えかけはしやぎたてているのだつた。

ルナ姫はイルカたちの純粹な友情を感じとり、それがテレパシーの伝達であることを悟った。イルカたちはだれが彼女の許へ一番乗りしたか詮議し、楽しげにレース経過を

論評しているのだった。

これまでも、動物の感情をテレパシーで読んだことはあるが、イルカがこれだけはつきり喋るとは想像したこともなかった。

ルナ姫のテレパシー能力がレベル・アップしているのだ。同様に視力に変化が生じていた。すでに暗闇は彼女の視界を妨げなくなっていた。海面下まで視界は及んでいた。信じがたい明確さで、視力を働かせようと意図すれば、細部まで読みとれた。まるで超ズーム・アップの望遠レンズでもセツトしたようだ。

透視能力が働きだしていたのだ。そのみならず、ルナ姫の潜在超常感覚は全て解放されていた。

その時、おそらく四、五キロメートルを隔てて、暗闇の海上に、ルナ姫は異様な存在を察知した。肉眼では絶対に見えるはずがないのである。鋭敏なイルカたちが気付くよりも、ルナ姫は早く、その接近を読みとったのだ。

怪物だ……

と、イルカたちが喧^{やかま}しく警告していた。

怪魚ではないか？

違うようだ。なにか非常に不思議なものだ……だれも見ることがないといっている

数キロ隔てたあたりを遊^{ゆうよく}弋しているイルカたちとの通信が行われているのだった。

危険そうか？

危険はないようだ……今のところは平和に見える

“姫”を他所へ移動したほうがよいか？

ルナ姫は興味深くイルカたちの通信を傍受していた。彼らはルナを“姫”という概念で呼んでいた。高貴な若い女性というイメージがちゃんと存在していた。いったいだれがイルカたちに教えこんだのだろう。それとも彼らの文化の中に初めからあるものだろうか。

“怪物”が移動を開始した！ そちらへまっすぐに進んでいる。ものすごいスピードだ！ 注意しろ！

と、見張りがけたたましく緊急の叫び声を送ってきた。

“船”よりも速い。われらよりもずっと速い！ これは恐ろしいものだ。避難したほうがよいかもしれない！

わかった。“姫”を移す……

イルカたちは緊張をいっせいにしめたが、それでもその笑っているような柔和な顔つきは変らなかつた。

「待つて！」

と、ルナ姫は叫んだ。イルカたちは鋭敏に反応し、動きを停止させた。

その者に危険はないわ。わたしはそれを知っているから……

イルカたちは彼女の言葉を完全に理解していた。言葉ではなく、同時にルナが伝達しているテレパシーをキャッチしたのである。

「彼を恐れる必要はないのよ。彼はわたしと逢うためにや

ってくるのだから……」

「彼」に「姫」を引渡してもよいのか？

と、イルカの一頭が尋ねた。

「彼」が「守護者」なのか？

わからない。「姫」が自分で判断するだろう……

「そのとおりだわ。「彼」がわたくしの「守護者」なのよ」

と、ルナ姫は答えた。彼女のため浮島になっているイルカ群はもちろん、周囲を泳ぎまわっている数十頭のイルカたちが興奮しきってぺちやくちゃ喋りだした。そのさまは、おとぎ話の小人たちの描写とそっくりであった。イルカたちは海に棲む^す親切な妖精なのだ。

「彼」が来た

「彼」は人間とは違うようだ。こんな人間は見たことない

「彼」はわれらより速く泳ぐ！

イルカたちの嘆声に迎えられるように、高速艇さながらに夜目にも白い水脈を曳^ひいて、猛烈なスピードで、「彼」はみるみるうちに接近してきた。どうやって移動するのか、いかなる高速艇にも増してエネルギーシユな疾走ぶりであった。

二、三回、ルナ姫を乗せたイルカ群の周囲を旋回すると、戸惑ったように停止した。奇異なものに遭遇して、思索しているようであった。

今度はスピードを殺し、ゆるやかに近づいてくる。ルナ姫は闇を透して、相手の戦士の隈取りで彩った怪異な顔を見た。思いがけぬ事態の激変に対応できず、いささか混乱していたが、ルナ姫を発見したからには、確かめずにはいられぬ、という吸い寄せられるような動きであった。

無表情なサイボーグ戦士の巨きな顔は、海中にあつて、イルカの背の浮島の上にあるルナ姫を見上げた。目には探るような光があつた。

ルナ姫はまさしく貴婦人の威厳をもつて、海中のサイボーグ戦士を見降ろした。美しい金髪の巻毛は海水に湿り、全身濡れねずみの姿だが、貧相にはならず、逆に魅力的だった。瞳が星のように輝いているせいもあるだろう。ルナ姫は体と精神が灼熱する高揚に捉えられていた。

「戦士ベガ、地球へようこそ。『フロイ』があなたを送り届けると約束したので、すぐにわかったわ」

と、ルナ姫は落着き払っていった。

彼女には逢ったことがある……だが、いつ、どこで？

サイボーグ戦士ベガの思考はいまだに混乱を脱してはいなかった。

彼女は夢の中で出逢った女性ではなかったのか？

長い長い果てしない夢の中で、彼女は私を訪れ、ずいぶん長い間話しあった……あれは夢ではなかったのか……

「夢ではないわ、戦士ベガ」

ルナ姫は開かれた本のページを読むようにたやすくベガの思念をチューニングした。

そうだ。彼女の名はプリンセス・ルナ。神の如き者。『フロイ』が私を覚醒させるべく派遣した異星の超能力者だ。『フロイ』は私を異星雲の辺境の星、地球へ送ると告げた……そうだ、思いだしたぞ！ 神の如き者『フロイ』は『幻魔』に対抗し異星の姫君に助力させるべく、私を辺境の星、地球へ送ると約束したのだ！ あれは夢ではなかったのか……

ベガの思念は暗く苦く後悔と落胆に満ちてい、ルナ姫を憤然とさせずにはおかなかった。

「夢ではなくてお気の毒ね。あなたはあの地獄のような宇宙の墓場で、悔恨に責めたてられながら、出口のない悪夢の中を逃げまわっていたほうがよかったというのね」

と、ルナ姫は痛烈な調子でいった。ルナのような女性が出す時、その声音はガラス破片を植えつけた筈しほと同じ効果を発揮するのだった。

「あなたはもう逃げまわり落ちのびるだけが精一杯の敗残兵に心からなってしまうているのね！」

「お願いだから、どうか私の心を読まないでいただきたいものだ、美しい異星の姫よ。私は長い長い戦いに倦うみ疲れしているのです」

サイボーグ戦士は悲しげに答えた。それは異星の言葉でなされたが、強力レベルのテレパシー能力を目覚めさせた

ルナ姫にとっては苦にもならなかった。

「あなたにはとうていわかりにならないでしょう。長い戦いは地獄そのものでした。『幻魔』は善きもの、美しいもの、価値あるものを全て根こそぎにし、破壊し、滅尽した。私にとっては全てが終わったのです、なにもかも……どうか私を責めないでいただきたい、ルナ姫よ。私は冷たい永劫の眠りから、無理やり引きだされたばかりなのです……」

「知っていますよ、ベガ、なにもかも。『フロイ』が彼の意識の中から、全てを映しだして見せてくれたわ」

と、ルナ姫は冷やかに答えた。

「かつてのあなたは比類ない勇者であり、何百億、何千億もの民があなたの名を耳にしただけで勇気づき、奮いたったわ。あなたこそまぎれもない真の英雄そのものだった……でも、みなが……アリエータが尊敬と崇拜をこめて、勇者ベガと呼んだ、英雄ベガはどこかへ去ってしまったのね。女々しい泣き言しか口にしない抜殻ぬけがらを残して……そうよ、今のあなたは抜殻だわ！ 巨大なエネルギー発生装置、幾多の超兵器を備えたサイボーグ戦士のたくま逞しい偉軀の中には、なにもないのね！」

ルナ姫は燃える瞳をベガの巨体に注ぎ、斬りつけるようにいった。

「あなたは偉大なる抜殻だわ！」

「なぜ、アリエータの名を……？」

サイボーグ戦士は驚いた目をし、傷ついた心を抱きしめ

る少年のようにおし黙った。

「わたくしは『フロイ』に導かれて、あなたの意識の中に入ったわ。あなたの想いの全てを知らされたのよ。でも、アリエータはもちろん、わたくしだってまさかあなたがこんなに空虚な、魂の抜殻になってしまうとは夢にも思わなかった……」

ルナ姫の瞳に痛憤のたぎり落ちる涙が光った。

「いつたい何があなたをこのようにみじめな卑しい敗残者そのものに変えてしまったの。誇り高いだれよりも剛毅な戦士ベガはどうしてしまったの？ アリエータが今のあなたを知ったらどんなに悲嘆することかしら……わたくしには自分のことのようにわかる。」

「フロイ」は助力者たるべき者としてあなたを選んで地球へ送ってくれた。だけどわたくしたちは戦う気力をなくした、惨めな負け犬は要らないわ」

「異星の美しい姫よ。私は二百年というものの戦いに明け暮れ、^{あげく}拳句の果てに私が戦士として帰属し、忠誠を捧げ、愛したものを全て^{うしな}喪い、敗残兵となったのですよ」

ベガはたまりかねたように抗弁した。ルナ姫の見せた憤りの涙にいたくショックを受けたことを隠さなかった。

「それを、今ただちに立ち直れとおっしゃっても無理というものです。あなたはなにもご存知ないのだ……長い長い戦いがどんなに人の心を倦み疲れさせるか、感性を摩滅させ、無残に荒廃させられるかを……あなたは『幻魔』の真

の恐ろしさをご存知ない。それは強酸のように心をむしばむ恐怖との戦いでもある。そして私の胸は荒涼とし、空虚になってしまった。しかし、それが、私の罪でしょうか？」

ベガは心から知りたがっていた。

「どうか教えていただきたい、美しい異星の姫よ。この蓄積した底なしの汚泥おでいのような魂の疲労は、私にはどうにもならんです。私は疲れた……とてつもない疲労です。それをどうかわかっていただきたいものだ」

「腰抜けの負け犬！」

ルナ姫の紅唇を痛烈な蔑みをこめた一語が迸った。

「戦士ともあるうものが、よくもそんな泣き言を際限もなくいえますね！ 地球人はあなたのような者の力など借りない！ 臆病者はさっさと立ち去るとよい！」

ルナ姫の怒りは激しかった。誇り高い美貌は凄絶なほど冴えた。瞳から稲妻が迸る。

「負け犬！」

「むごいおっしやりようだ」

ベガは茫然としていた。ルナ姫の迫力に押しまくられていた。彼の巨きな掌てのひらに乗りそうな腰をしたかぼそい女性が怪異なサイボーグ戦士を幼い弟のように叱りとばしているのだ。

「あなたがかりそめにも戦士であるなら、恥を知りなさい。誇りを失った戦士は、戦士の屍しかばねよりも無価値です。あな

たを信じて地球へ送り届けてくれた“フロイ”が気の毒です。あなたは負け犬になることによつて、あなたを育みそだてた、そしてあなたを愛し尊敬した、故郷の星々の人たちを全て裏切っているのですよ！ なぜそれがわからないのですか……あなたは本当にそれでも戦士だったのですか」

「私は……そうです、昔は戦士でした」

ベガは聞こえないほどの小声で呟つぶやいた。ルナ姫の叱責しっせきに打ちのめされてしまったのだ。実際に雷撃を受けたとしても、これほどのショックは感じなかつたであろう。

「あなたを信じ、愛して死んでいった人たち……とりわけアリエータに対して弁解する言葉がありますか？」

「弁解の余地はありません……二千年の間、私は自分を見失っていたようです。ルナ姫よ、まったくあなたのおっしゃるとおりだ。私は恥で全身が燃えあがりそうです」

「もう一度尋ねます」

と、ルナ姫は容赦なく追い詰めた。

「今もなお、あなたは戦士ですか？ はつきり教えてください」

「そう……私は今もなお戦士です。たとえ宇宙の敗残兵であつても、私が依然として戦士であることに変わりはない。私は戦士であり、それを止めることはできないのです。たった今、それがわかりました」

ベガの声音は力強さを加えた。

「その事実を私に教えてくれたあなたに感謝します。あなたはきびしく言葉の答^{むち}で私を打ちのめすことによって、私を蘇生させてくれた……ありがとう、プリンセス。あなたとともに歩むことで、私はあなたに感謝を示そう。神の如き者“フロイ”の選択が誤りなきことを証明するためにも……」

ルナ姫は無言で輝くような笑顔を見せた。たとえ濡れネズミであっても、可愛らしく美しいプリンセスであることに变りはなかった。

「よろしい、勇者ベガ……」

と、ルナ姫はおごそかにいった。

「神の如き者“フロイ”の推挙を受け容れ、あなたを“大連盟”地球戦団の軍事顧問に任命することにいたします。今ここで、誓ってください……」

と、ルナ姫はいった。

「今後、私たちと生死をともにし、“幻魔”の侵攻軍と戦い、宇宙に平安と調和を回復するべくことを、戦士の誇りにかけて誓うのです。わたくしとあなたの良心と、そしてこのイルカたちが証人です」

「誓います……」

と、ベガが答えると同時にイルカたちが喧^{やかま}しくお喋りを再開した。息の詰まる緊張から解放され、楽しくなったというはしゃぎぶりだった。

「人間だけが“幻魔”と戦うのではありませんね」

と、ルナ姫が感慨深げにいった。

「地球上の生きとし生けるものがこぞって、破壊者“幻魔”と戦うのです。今、気付きましたが、イルカたちも人間にまだ知られていない“力”をもって、来たるべき“幻魔大戦”の戦線に参加するだろうと彼らは告げています。もしわたくしと、勇者ベガ、数百万光年隔って生きていたあなたが、しっかり手を結びあって、愛と信頼をいつまでもつなぎとめるなら、わたくしたちは決して敗北しないでしょう。“フロイ”がわたくしの意識の裡に残してくれたメッセージです……」

「プリンセス、戦士は誓いを守るものです」
戦士ベガはいかつい巨きな手を海中から伸ばし、同時にイルカの浮島の上からさしのべたルナ姫の白い繊手をそつと掌に握りしめた。

「私の忠誠はあなたのものだ。私は今、確実に甦った。この奇蹟の邂逅の時を与えてくれた“フロイ”に……宇宙意識でも宇宙エネルギーでもなんでもよい、無神論者だった私だが、その存在を神と呼んでもよい、深く感謝しよう。そして私は今もなお、私を必要とし、信じてくれる人々のために生きよう」

「わたくしたちはあなたを歓迎します、勇者ベガ」
ルナ姫はベガの腕に抱き取られ、巨大な幅広の肩に座りながら朗らかにいった。

「わたくしはこれから仲間たちを捜さねばなりません。ま

だ逢ったことのない人々だけれども、名前も顔も、どこへ行けばよいかもすでにわかっています。未来透視によって……でも、これさえも、“フロイ”の贈りものなのでしよう、きつと”

イルカたちがさつと散った。彼らがどんなに空中高くすばらしいジャンプを見せても、巨人戦士ベガとルナ姫の姿はもはやどこにも見当らなくなっていた。

彼らは任務を果たすべく、去ってしまったのだった。

2

人間には必ず、失意の時が訪れる。それは人が人である限り避けがたいものだ。社会的動物である人間は、孤島や人跡未踏の密林の奥地にでも、孤立して生きなければ、己れの人生を思いどおりに生きることができない。

そのようなことは不可能だし、人が常に自我の拡大を望むならば、他との摩擦により、挫折は尽きることがないだろう。

挫折と無縁の人生はありえないし、それを自己鍛練の機会とみなし、奮起するきわめて幸せな人たちも存在しており、彼らの認識はまったく正しいのだ。

だが、いつも自己中心に生きている人間、自我の無制限な拡大こそが人生最大の目的とみなす人間たちは数多く、彼らは必ず社会的勝者となるべく、他人を排除する競争原

理を信仰する。

この種の信念体系の信奉者たちはなによりも挫折を忌み恐れる。挫折は他人のためのものであり、自分の身に生じてはならないのだ。

自己中心に徹して生きようとするとする人間にとって、挫折は耐えがたい大きな苦しみだ。挫折を恐れ、回避しようと焦るほどに、その苦痛は増大し、さらに耐えがたいものになる。

自己の生きたいように生きようとし己れの生き易さを他人に要求して生きることが、自我の拡大欲というものだ。他人は必ずしもそれを許容はせず、激しく抵抗する場合もあつて、思うにまかせず凶暴な自我は傷つき、血を流すことになる。

高校生、あすまじょう東丈がそうした典型の一人だった。丈は重ねて挫折を幾つも味わうことになった。

彼は失恋し、志望大学の格落ちを指導教師に宣告され、高校野球部のレギュラーからはずされた。

友人に裏切られ、家庭には不和があり、肉体的欠陥の恐怖があり、およそ考えられる限りの挫折が丈に波状攻撃を加えてきつつあった。

悪運は仲間連れでやってくるのを好む。俗にいう憑つきに見放された時がこんな状態を招き寄せる。

一九六七年春。

東京杉並、青林学園高校の野球部では、新年度のレギュラーの発表を待っていた。

すでに内定は耳打ちされているのだが、やはり正式告示となると、さすがに緊張した若々しい、あるいは子供っぽい顔が並んでいた。

前キャプテンの手には、各ポジションのレギュラー氏名を記した紙が巻かれて筒になっている。部員たちは心を逸らせ、固唾かたすを呑んでいた。

「全員集合したか？」

と、三年の前キャプテンが腕の時計をのぞきこみながらいった。

「じゃあ、発表するぞ、いいな」

「キャプテン！ 丈と四朗がまだです」

「遅い！ いったいなにをやつとるんだ、あのバカ」

と、前キャプテンはぎゅつと眉をしかめて不機嫌な声音を出した。

「担任のデバ……いや出羽先生に……」

と、二年の部員が野球部長の顔をうかがい、ペロリと舌を出した。

「出羽先生に油を絞られています」

「油を？ なんでや？」

「学年度末の考査の成績が悪いとかで……東大志望は諦めたほうがよいと説得されているのでは」

失笑が湧いた。

「青年よ野心家たれ、かよ……」

「トウダイ違いね、無理むり」

「がむしゃらだからなあ、あのチビ。練習試合でも目の色変えてスパイクしやがるんだから……」

「汚ねえんだよ、あいつ。へボなくせにバッティング練習だつてもう一本、もう一本てねばりやがるしよ」

丈の評判はかんばしくないようだった。

「まあ、四朗はともかく、丈が頑張り屋だというのは確かだが……」

と、野球部長の中年教師がなにやら口重げにいった。

「とかく、がむしゃらに背伸びをするのが難点なのだな。

根性があるのはいいが、チームワークが丈一人のためにガタガタになってしまう」

前キヤプテンは唇を妙な形に引き締めながら、部長の述べ懐とも愚痴ぐちともつかぬ言を聞いていた。

「先生……今度の決定のことですが、あらかじめ丈に話しておいたほうがよかつたんじゃないですか？」

声を落していった。

「ん……しかし、そうはいつても、丈だけを特別扱いするわけにはいかんだろう。こと志と反するのは、なにも丈一人だけじゃないんだ」

部屋はだしぬけに静まり返った。その会話の意味するところは明瞭すぎた。丈にとっては凶報だ。

「しょうがねえよなあ。運だよ、運」

職員室を出た二人は、疲れやすい老人が覚えるような疲労を抱き、げっそりした顔つきになっていた。

「ちっ」

校庭に出ると、丈は荒々しく唾を吐いた。癩の強さはつきりと顔立ちをはじめ、全身の動作に表われていた。短で瞬発力があり、思いどおりにならないと堪え性がない。他人の動作や思考が常にワン・テンポ遅れているように感じ、苛々する。いつも先頭を切っていないとおさまらない。自己に対する自分自身の評価と他人の評価が必ず食い違い、期待はずれになる。なぜ他人が己れを過小評価するの
か不思議でならない。

彼の目の中には、絶えず他人の賞讃を期待する落着かない光がある。そのために必死の努力を傾けるのだが、いつも目標は彼の力にわずかながら余る。

丈はそういう少年だ。身長一六二センチ。彼の心の隅で焼けた石炭みたいに、間断なく苦患をもたらし続ける元凶である。中学二年当時からまったたく背は伸びず、凍りついてしまっている。彼の全ての鬱屈はそこに起因する。

「実に凡庸なせりふしか吐かねえな。世の常識って奴を、一歩たりとも超えることができないんだ、奴は。しかも、自分の奉ずる常識の線を、他人が超えることすらも許せないと来てるんだ。」

奴は自分の目で、たとえ幽霊を見ようが、空飛ぶ円盤を見ようが、断乎として認めることを拒否するぜ。そんなも

のが実在するというのは、世の常識に反するからだよ」

丈は見るからに向う気が強そうだった。口調も戦闘的であり、必要がない時も相手に突っかかるような口調で喋る。議論にかけても見かけどおりのファイターだ。自分の条理が通らない時は、論理をすり変えてでも、論破されまいと頑張る。

絶対に負けたくないのだ、と、江田四朗は小柄な友人の性格を見ている。が、必要以上に丈が攻撃的なのは、本当は自信が欠けており、それを隠蔽いんぺいするためだと思っているが、決して口には出さない。

丈は他人に批判がましいことをいわれると、全人格を否定されたかのような、過激な反応をしめす。ものすごい劣等感の持主であり、それを刺激すると、丈はきわめて不健康な精神状態の人間になる。

江田四朗は論争家タイプの人間ではなかったし、丈とつきあっていたいけるのはそのためだった。

丈は圭角けいかくだらけの少年だったが、それを償うのは、彼が実に凜然りんぜんたる美少年という事実であった。色白で眉まゆは濃く、瞳は黒々と輝く。その黒い瞳に不穏な光が絶え間なくちらついているとしても、十分な魅力があった。

もっとと人気があってもいいはずなのに、丈はどちらかといえば、敬して遠ざけられていた。あまりにも手強てごわく、迫力があるうるさがただからであろう。

「常識に凝り固まった奴ってのは、不善だ。おれはそう思

う」

丈は妥協のない口ぶりで続けた。

「受験と高校スポーツは、デバがいうように本当に両立しないか？ そんなテーゼはそもそもありえないじゃないか？ 両立させるもさせないも、当人の意志強固さであり、根性^{ガッツ}なんだからな。デバは正しくは両立しがたいというべきなんだが、両立しない、とすり変えているんだ。奴の怠惰さの証明だよ。」

奴は生徒に、受験に専念させるように仕向けることで楽しみたいんだ。だが、おれは絶対に両立させてみせる。おれにとつて、青春とは、自己の可能性に挑戦することだし、ぎりぎりの限界まで突きつめてやる。それが、おれにとつてはガッツつてことなんだ」

丈は話しだすとすぐに熱っぽくなった。

「なあ、四朗よ。おれはこんな体でも中学から柔道をやったし、サッカーもやった。剣道もやり、高校ではボクシングか野球かで、野球をとった。だけど、勉強を怠けたわけじゃないし、英会話をやり、ハムの免許を取り、哲学書だつて読んでる。ニーチェやショーペンハウエルをな。おれぐらい頑張ってる奴が、うちの高校に何人いる？」

おれはフル・オーケストラのタクトを振れるぜ。ピアノとバイオリンを四つの時から習ったから、スコアだつて自由に読めるんだ。

おれは他人に負けるのが絶対にいやなんだ。負け犬にな

るくらいなら、自殺する。デバの奴だって、おれに根性がないとは絶対にいえないはずだ」

「丈のお姉さんは、ずいぶんいろんなことをお前に仕込んだんだな」

と、四朗はさりげなくいった。

「丈の才能を伸ばしてあげようとしたんだな。いいお姉さんでうらやましいよ。おれもそういう姉がいたらな」

「親代りつてやつだから……小さいころはけっこうスパルタだったんだぜ。ピアノをガキだから指が小さくて、うまく弾けないだろ。そうするとモノサシで、こう指をピシッとぶちやがるんだ。わんわん泣きながらピアノを弾いたっけ。おつかねえお師匠さんだったよ。今はさすがにぶたれないけどな」

丈の口調が和らいだ。丈には、彼と顔だちが酷似した美しい姉があるのだ。十歳近くも年上なので、母親のいない丈を親代りとして育てるには充分であった。四朗にとつては、神秘的なほどうたけた大人の女性であり、ひそかな憧れの対象であった。いまだに未婚のまま、丈と弟の卓の世話を親代りで焼いている。

丈とは同系の美貌だが比べようもなく眉と瞳が優しい、やや寂しい顔立ちの女性だった。

問題は丈の弟だ、と四朗は思った。巨漢ともいべき高校一年生で、一歳上の兄である丈とは人種が異なるようだ。弟の卓は傑物とでもいべき存在で、高校柔道界の逸

材である。こちらは完全に文武両道であり、身長一九〇センチという巨体の印象とは裏腹に、学業成績は学年一をくだらない。すごい鋭利な頭の持主なのだ。

丈は決して弟のことは口にしなかった。

「僕はまさに凡庸そのものだから……」

と、四朗は疑わしげにいった。

「両立はむりだ。結局はどちらかを選ぶことになるからなあ」

「この期に及んで、情ないことをいうな」
丈がきめつけた。

「なんのために、この一年間、汗と泥にまみれてグラウンドを這いずりまわったんだよ。そんな弱音を吐いてるようじゃ、ボロ雑巾ぞうきんみたいになったユニフォームが泣くぜ」

むっとした表情だった。

「レギュラーのポジションをがちりこの手で掴もつてんだぜ。それより発表にだいぶ遅れた。行こう。走ってくぞ！」

駆けだす丈の後を、四朗があわてて追う。

「だけど、丈よ……お前はともかく、僕のレギュラーは怪しいもんだ……僕は神経がちょっと鈍いところがある……」

走りながら四朗がいう。

「馬鹿いえっ、じゃ、おれが最初から運動神経があったらいいのか？ 冗談じゃねえ、他人の三倍猛練習したから

だ！ ガッツならだれにも負けねえ……そう自信がついたからだ……」

二人は離れた部室へ向けて、校庭を横切り、せつせと走った。

「丈よ、おれな……レギュラーはずされたらな……受験一本に絞るよ」

四朗は息を弾ませて喋った。

「なにっ、退部するってのか?！」

「ああ……そうする……」

丈はいきなり足を停めた。行きすぎる四朗の背中を眼を怒らせて睨みつけた。

「日和つたな、お前」

「怒るなよ。家庭の事情というのがあるんだよ」

四朗は丈をなだめるように、気弱そうにいった。丈のきつい目を背中に受けたまま、振り返ろうともしない。

「おやじが退職したんだ。再就職するだろうが、もう年だし……だから浪人なんかしてる余裕はないんだ。おれは、レギュラーになれなくても、むしろそのほうが……」

「そうじゃない。根性が足りないんだ」

丈は咬みつくような口のききかたをした。

「家庭の事情だど？ それを口実にしてるだけなんだ。もう努力するのがいやになった……それだけのことなんだよ、お前は」

「そんないいかたはないだろう」

さすがに穏和な四朗の顔色が変わったようであった。
「後できつちり話をつけるさ。今は時間がない。行くぞ」
丈は冷淡にいい捨てて、再び走りだした。

血と汗どころか、反吐へどを吐き、腰が立たない猛練習の明け暮れによって、嘗々と築きあげたものが、砂上の楼閣であることを知った時、都合よく再起の努力など湧いてくれるものではない。目的完遂の原動力が自我の拡大にあった時、崩壊がもたらす地獄の苦しみだけだ。

正選手のポジション表に丈の名前はなく、皮肉なことに、まったく自信欠如していた江田四朗の名はレギュラー・メンバーとして登録されていたのである。

丈の顔面は蒼白になり、握りしめた両手の拳は抑えようもなくぶるぶる慄えた。頭の中が真空になったように、耳の中は轟音で充満した。

部員たちの目が、血の気を喪うしなった己れの顔を窺うかがっているのはわかるが、どうにも制御できない。たとえようもない喪失感と失墜感とで血が逆流し、立っているのが困難になった。前キャプテンがなにごとか話しかけているが、意味をなす言葉として丈の耳には聞こえてこない。

丈は正選手の座を、一年生部員に奪われたのである。二年生の丈よりもはるかに体格がよく、素質に恵まれ、中学野球のヒーローだった新入生に。

丈はすさまじく口をかたく結んだまま、部屋を飛び出し

た。足許がふらついたのが、堪まらないほど癩しやくだった。

「丈！ 待てよ！ どこへ行くんだ！」

前キャプテンの制止の声を振り切るように走る。思考がバラバラに飛散し、なにも考えられない。頭の内部で暗闇が咆え猛っている。体に感覚がなく、重く痺れて自分のものではないような足で、丈は走る。激動で心が軋きしんでいる。全世界が意味のない無秩序なマツスに変貌へんぼうして行く。

東丈が真蒼まっさおな顔で飛びだして行った後、部室は気まずい、金属の味のする沈黙で満たされた。

後味が悪すぎて、互いに相手の視線を避けあっていた。丈の反応があまりにも強烈だったので、度肝どぎもを抜かれてしまったのだ。

東丈が従容と運命を受け容れるタイプではなく、最後まで投げずに食いさがり、あくまで闘争するタフなファイターだと知ってはいても、丈の振舞いはあまりにも異常すぎた。

悲劇の予感を感じたように、だれもが慥然ぶぜんとして居心地悪げにしていた。

「シヨックだったなあ、丈には……」

と、三年生の部員が咳せき払いしながらいった。

「無理もないけどよ」

「ひよっとすると退部するかもしれねえな。あの取り乱しようじゃ……」

「しょうがねえよな。がつくりきてるのは丈一人じゃねえんだし。おれだって二年の時、補欠に落されて滅入ったもんな」

「実力の世界だから、きびしいよ。どこだってこんなもんだよ。なんでもそうそう自分の思いどおりになるもんじゃないしなあ」

三年生の部員たちが口々にいった。

「とにかく、あいつは野球向きじゃないよ。それが原因の全てだよ。だれだって、みんないつてたじゃねえか」

それが事実なのだった。部員たちは野球部長も含めて、なんとなく納得し、ほっと気が楽になった。

「遅れましたが、ミーティングを始めます」

と、新任のキャプテンがどもりながら口を切った。丈のことはしばらく気になるだろうが、そのうちに忘れてしまおうだろう。脱落者にとつて落伍は重大問題だが、他人は気にもとめないものなのだ。

だれが悪いのでもない、と理性ではわかってはいる。どこへも尻を持って行きようがない。

あてどのない痛憤に丈は慄えた。

強いていえば、悲劇は丈本人の背伸びがもたらしたものだ。

丈の肉体的能力が人並以下ということはない。だが、スポーツにおいては、持って生れた素質がものをいう。とく

に、丈が卓越した素質を有する競争相手を持ち、その相手が努力家であって、資質をより生かしているならば、肉体的ハンデを負った丈には、根性^{ガッツ}だけではいかんともしい限界が存在した。

丈は遣^やり場のない憤りに悶^{もた}えた。他人が八時間眠るなら、こちらは睡眠時間を四時間に減らすことができる。他人が二時間練習するなら、こちらは練習量を倍に増やすこともできる。努力と根性^{ガッツ}ならだれにも負けない。

だが、持って生れた貧困な資質をどうすればいいのだ。死ぬ気で努力しても、破れぬ壁が厳然として存在する。

丈は、人気^{ひとけ}のない校庭のはずれの、桜の古木に顔を押しつけ、崩れかけている心を必死で抑えつけていた。

畜生！ 負けてたまるか！ おれは負け犬にはならないぞ！ こんなことでめげたら、おれは負け犬になる……

丈は顔を古木のごつごつした幹に打ちつけることよつて、心の激震に堪えようとしていた。堪えようとするほどに、しだいに力まかせになってくる。がつんがつんと音がするほど激しく叩きつけ、その衝撃と苦痛がむしろ快かった。

自分自身に攻撃的であることしか、今の丈にはなすすべもなかったのだ。

「丈！ やめろ！ そんな無茶なことやめてくれ！」
背後で悲鳴のようにだれかが叫んだ。江田四郎が後を追

ってきたのである。

「そんなこと止めてくれ！ 死んじゃうぞ！」

丈は、自分の身を気遣ってくれる友人に対して、なんの感動も覚えなかった。ただわずらわしく、うとましいだけだった。

だが、狂ったように古木の幹に顔を打ちつける動作だけは止めた。葉だけになった桜の古木が揺れていた。

「丈、おれな……さつきもちよつとといったけど、家の事情で退部しようと決心してるんだよ」

「お前は、正選手になったんだろ……」

丈は振り向きもせずに行った。自己閉鎖と拒否のためにおよそ感情のない声音であった。

「だけど、よく考えてみると、やっぱりおれには受験と野球を両立させるのは無理だ。両方ともためにしちまう……だから、おれ、受験一本に、的を絞ることに決心した。で、キャプテンに頼みこんで、ライトのポジションをお前にゆずりたいんだ……」

「ふざけるな！」

丈は引き裂けるような声を出して、べったり血のにじむ蒼白な顔を四朗に振り向けた。額には醜い傷が口を開いていた。目は屈辱と憤怒にぎらぎら光っていた。四朗が思わず後退りするほど凄惨な表情をしていた。

「そんなことが通用するとお前は本気で思ってるのか！」
丈は憎悪に光る目で、歯ぎしりした。

「お前は、おれの気性を知っているくせに、そんな白々しいことをよくいえるな！」

「丈……おれ、そんなつもりでいったんじやないんだ」

「おれはな、チビだ。だれもがいうようにチビなんだよ」

丈は切り裂くような声音でいった。呪詛じゅそに満ちており、四朗は背中が冷気で覆われた。

「肩も弱いし、走るのも遅い。いくら努力しても、これだけはどうにもならない……チビだから、どうしてもパワーがない。今時の小学生なら、おれよりもでかいのが沢山いる。」

反吐を吐きながら頑張ってみても、素質のある奴が本気になつたらかなわない。おれには一番肝心な素質がないんだ。だから、これ以上はどうやっても伸びない。おれの背丈と同じさ……そうだろ、四朗。お前だつてそれを認めるはずだぞ」

「丈……」

四朗はいいかけて言葉にならず、顔をいたずらに振り動かした。

「それが真実なんだ。おれは一年生の素質のある奴にポジションを奪とられた。だからといって、他人に変に同情されたり憐あわれまれたりする憶えはない。人を負け犬扱いするな！ おれはお前を殴りたくてうずうずしてるんだぞ！」

四朗、お前はおれに最悪の侮辱を加えてくれたな……」

丈の体は激昂げっこうに慄おそえていた。

「悪かったな……おれはただコンバートできればと思ったんだ」

四朗は茫然ぼうぜんといった。心が苦く冷めて行くのを感じていた。丈はもちろんどうかしているが、自分の間抜けさにも腹が立つてきたのだ。

友情なんて、この程度のものか、と四朗は冷めた心で考えた。たかが野球、と彼はいいたかった。その程度のもので、人生の破滅のように反応するのは馬鹿げている。たかが高校野球部のサードのポジションの取り合いではないか。社会の動向にいささかも変化をもたらすわけではない。あまりにも卑小でちつぽけだ。

もちろん、そんなことを口にすれば、丈は本当に四朗を殴るであろう。だから彼は黙っていた。

受験勉強に専念すれば、丈との仲も稀薄になり、しだいに遠のいて行くだろう。

丈はヒステリックで異常だ、と彼は思い、己れの思念の冷淡さに愕おどろいた。これまで親友だと思っていたが、こんなことで心が離れるとしたら、友情とはいったいなんだっただのか。

「その、額の傷だけど、医者へ行ったほうがいいな。たぶん縫わなきゃならないだろう。相当ひどい出血だ」

と、四朗は乾いた声でいった。これ以上丈のそばにはいたくないのだった。もうつきあいきれねえやと内心呟いている自分の薄情さに気がとがめながらも、幻想に等しかっ

た友情の破綻はたんを受け容れる気持になっていた。

3

野球部を退部し、友人の江田四朗と気まづくなくなり、立て続けの挫折を味わった東丈は、更に失恋の憂き目を見ることがになった。

恋と呼ぶには、丈のエゴは肥大しすぎていたかもしれぬ。丈は昔から異性に対して淡泊という以上に冷淡な性向があつたようである。

丈はかつて異常なほど可愛らしい少年だった。端正な愛らしい顔立ちに、黒く輝く瞳の魅惑は、女たちを文字どおり身慄みぶるいさせ、天使と呼ばせるに充分だった。

小学生時分まで、丈は見る者に息を吞ませる美少年であった。造化の神がよほど念入りに手がけたとしか思えなかった。

女たちに限つていえば、丈は讚美や追従、媚態びたいに慣れきり、ちやほやされるのに飽きあきしていたのだ。

通学区の異なる他の小学校、中学校の女の子から大量のラブ・レターを渡された。しまいには読む気もなくなり未開封のままかたはしからドブ川に捨てた。

同性の少年たちはたいていが丈の敵だったが、女たちは徹底した彼の讚美者、崇拜者であつた。生れながらのドン

・ファンではないかと大人たちは心配したが、そのころから丈は一種独特の教祖性カリスマを身につけていたようである。

だが、丈は自分の持つている女性たちへの影響力に嫌悪を抱いていた。年齢に関りなく女たちがねっとりした視線でへばりつき、しきりにまとわり、つきまとうのがいやだった。自分の母親と同じ年代の女たちまでが、いやらしい媚態を示すのだ。丈は彼女らの体臭を嗅かぐことすらうとましかった。

そんな過去が、丈を異性に対して冷酷にさせる素地を形成したようである。

ガールフレンドがいないわけではなかったが、所詮恋人の域に高まりはしなかった。いつも丈に過大な要求を突きつけるようになるからだ。手紙の返事をくれないとか、電話を丈からかけないというくだらぬことが、トラブルの原因になる。彼女らはきまっけて丈を独占しようとするのだ。った。

一方、丈は女性に専有される気は毛頭なかった。まずいことになった。丈にとってはまったく意外な愁嘆場を招き寄せることになってしまふのである。

多趣味で、やりたいことが山ほどある丈にしてみれば、他愛もない女の子とつきあっている時間がまったく惜しかった。

高校入学後、丈はステディのガールフレンドを持った。ピアノを弾く少女で、名前を沢川淳子じゅんこといった。姉の

三千子の仕込みで、一時はピアニストを志望したこともある丈と波長が合ったのだ。手が小さいため、ピアノは断念したが、音楽に関心を失ったわけではなかった。沢川淳子とつきあうのは退屈ではなかった。

少女は丈より二歳年上で今年音大に入学したばかりだった。鋭い感性の持主であり、なんといつてもすごい美人であつた。

丈が彼女とつきあいだしたのは、そのためもあつたに違いない。自分より年上だという点も気に入っていた。丈にとつては、ガールフレンドとはその程度のものであり、仲間に顕示するアクセサリーの性格を持つものだった。

知りあつて一年間、二人の仲は恋人に格上げしてもいい状態に進んでいた。年上の少女はすでに熟していて、窮極的な関係を望んだが、丈はそこまでは踏み切れずにいた。

やはり丈にとつて女性はアクセサリーにすぎず、過大な要求を持ちだされることを拒否していたのかもしれない。

恋人だと自分では思っていたのだが、さほど心が熱しているわけではなかった。他人が目をはひるませるほどの美人でなければ、これまで同様、単なるガールフレンドで終始していたかもしれないのだつた。

沢川淳子という少女を、愛していると丈は自分にいきかせていた。話は合ったし、いつしよに時間をすごすのは楽しかった。次に逢う日をきめなければ、さよならをいいあうことはなかった。若い異性の肉体の刺激的な感触も知

り、荒い呼吸をつく熱した唇の味を覚え、薄い小さな下着の下に指を潜らせて、生暖い鮮血のような手触りにスリルを感じた。

互いに愛撫^{あいぶ}しあつて欲望を高めるすべも習い覚えた。彼女が自分に夢中になるのを見るのは快樂であつた。興奮の極に達すると、恥ずかしがりやの美少女が別人のように変貌してしまふのだ。

丈は彼女を果てしもなく引き込みながらも、彼女の欲するものを、手を高く掲げて遠ざけるようにして与えようとはしなかつた。

それは決して丈の清教徒的少年の潔癖さでもなく禁欲主義のもたらすものでもなかつた。相手に、多くを要求され奪われることを恐れる、単なるエゴのなせるわざであつた。その点、丈は甘やかされた子供同様、実に自己本位で、卑劣だつたのだ。

野球部を退部し、親友だつた江田四朗と気まづくなつた後、丈は恋人の沢川淳子とも不和になり、喧嘩別れをした。四月の挫折以来、丈は陰鬱^{いんうつ}になり、とげとげしい不機嫌さをウニのトゲさながらに生やして、周囲の一切に対し敵意をことさらに隠そうともしなかつた。

だれに対しても、咬^かみつくような喧嘩腰で応じるのだつた。自分でもぶざまだと思ひ、どうかしていると反省が掠めるのだが、どうにも自制がきかないのだつた。

自己閉鎖し、手のつけられない不機嫌のウニの殻の中に閉じこもっているほうが、気楽でいいというふてくされた気分が続いていた。

ひどく蒸暑い夏が訪れ、丈のささやかな挫折には関りなく季節は移って行くが、丈の鬱屈は強固に持続していた。

周囲では彼の精神失調を気遣いはじめた。

恋人との仲が破綻はたんするのは当然といえたらう。少女は丈のねじくれた凶暴な自我に対応することができなかつた。彼女は大学の新しい世界の急速な展開に気をとられており、級友や上級生との新しい交際にいくらか魅力を見出すことができたからである。

年下の恋人のわけのわからぬ幼稚な鬱屈を理解しなかつたし、その努力を払おうともしなかつた。

「悪いけど、あたしにはあたしの生活があるのよ。丈がなにを悩んでいるのか知らないけど、あたしにまで当り散らすのはやめてほしいわ」

と、沢川淳子はきわめてはつきりといい渡した。

「あなたの顔見ていると、こっちまで気が重くなっちゃうもの。だいたい野球なんて部活動、足を洗うのが当然じゃない。受験だって、そここの大学でお茶を濁すわけじゃないでしょう。そうなにもかもが丈の思いどおりになるわけじゃないし、そんなことでイジイジ悩んでるなんて幼児的だわ。」

とにかく、あなたの自分勝手な不機嫌さの飛ばっちりで、

あたしの生活まで陰気にしたくないの。当分逢わないことにしましょう。その方がいいわ。あたし、決心したの」

上野でのバイオリン・コンサートを聴きに行った後、美少女は容赦なく宣告し、二人の仲は終わった。彼女はますます成熟の度合を増して美しく、高校生の丈にとってはアンバランスな恋人になりすぎていた。

「イジイジしてる丈には全然魅力ないわよ」

と、彼女は別れぎわに辛辣しんらつな言を吐いた。

「あなたの颯爽さつそうとしてるところが、とつてもよかつたんだけど……丈って案外挫折に脆いもろのね。見た目とは大違い……」

彼女も、いくらか気がとがめていて、自己正当化を計らねばならなかつたのだろう。

「君がその気なら、それでいいさ」

丈はようやくのこと言葉を喉の奥から押しだした。

「君がそういう女だと早くわかつてよかつたよ」

未練を残すのは無念すぎた。

「あら、あたしがどういう女だと思つてたの？ 悪いけど、あたしつて、なんでもハイハイということをきく可愛い女じゃないのよね。他人の持物みたいに思われて、どうでもいいように扱われるのはいやなの。あたしだって傷つきたくないもの。特に八つ当りで他人を傷つけて平気な人とはつきあえないのよね、やつぱり」

彼女は丈をとことんまでやりこめた。

「とにかく、あたしは自由で、だれに対しても何も負い目はないんだし、それをあなたにはつきりいっておきたかったの」

上野の森は分厚く夏の葉が繁り、二人連れの姿がむやみに多かった。しかし、今の丈には、枯れ木の荒涼とした光景にも等しかったのである。

いうまでもなく沢川淳子のいい分には理があつた。一方的に悪いのは丈自身であり、返す言葉もなかった。だが二人のこれまでの結びつきが、愛でも恋でもないことが明白になっていった。彼らが互いに要求していたものは、相手の美しさや魅力であり、他人に顕示するアクセサリーの域を出ないものだったのである。

「でもね、丈、こうなつても本当はあなたにとって、そんなにシヨックじゃないと思うの」

と、少女は最後に止めを刺した。

「丈にはお姉さんがいるものね。本当いうと、あなたにはだれも必要じゃないのよ。あなたにとっては、お姉さんほどすばらしく完璧な女性って他に存在しないのよね。あなたとつきあってみて、それがよくわかつたわ。この先、どんな女の子があなたとつきあうにしても、あたし、その娘がとても気の毒に思う。だって、どんなに頑張つても、あなたの心の中の比重計を見れば、あなたのお姉さんになわないんだもの。マザコンというけれど、あなたのはシスター・コンプレックスね、きつと」

それが訣別の言葉となった。彼女の言葉は、たとえ自己正当化から出たものであっても、全てが正鵠を射ていたのだった。それが丈を打ちのめした。

(続きは正式版でお楽しみください
e文庫 <http://www.ebunko.ne.jp/>)

平井和正『幻魔』を考える PART 1
救世主はどこにいる

目の中に鱗が飛び込んだのか、それともそれまでであった鱗が落ちたのか、いずれにしても新しい視野を獲得すると人間は時として、思い切り愚かなことをしていても、それに気付かないことがあります。理屈としては判っています。が、現実においてありのままの自己を悟ることはなかなか困難です。

1978年夏、それまで九カ月間関わり合っていた新宗教から離脱しました。苦い幻滅と失望が私を捉えていました。私は、さながら宇宙船から放り出されて、巨大な虚空に漂流しているアストロノートの根源的不安を味わうことになりました。

新宗教の指導者も組織も、私が信じたいと願っていた理想とは、およそ程遠い実態をさらけだして、宗教法人という法制度によって過保護にされる人間と組織が、どれほど墮落できるか、私に教えたのでした。

全力を傾けて書き上げるのにまる九カ月間を費やした、三冊の指導者名義の大ベストセラー本を残して、私の理想は空しくなりました。私はその間、まったく己れの小説が書けず、新宗教が教理として掲げる架空の神 人間の顔を持った神に本気で仕えようとした己れの愚かしさを思い

知らされたのでした。

私は、生活を建て直すためにも、大急ぎで新作の執筆に取り掛からねばなりませんでした。宗教とはまことに貪欲な大怪魚そのものです。人間の身も心も魂も食らいつくし、排泄物に変えて吐き出す。作家にとつて、宗教とは致命的な毒物だと早めに悟らされたことは、真の神の慈悲でした。それでも、私は真の神と、真の神が世に送り出す『画期的な救世主』について考えようとすることを止めませんでした。新宗教の教理、指導者、その組織と、袂を分かつたからこそ、そうしなければならなかったのです。私が恐れるのは、自身が幻滅の悲哀による自己憐憫に溺れて、ニヒリズム虚無主義の虚空に沈むことでした。

もし、現代物質文明社会のさなかに、真の救世主が現れたとしたら、いったいどのような活動を行うのだろうか。現世のすべてをからめとる、経済活動（金銭の神）のオクトパスの触手の中で、『神の呪い』を切り抜けていくことが果たして可能だろうか。

その思考実験を成功させることができれば、私の九カ月間の心身ともにわたる大怪魚の腹中の苦悩も償われることになるかもしれない。いや、そんなことを遅疑逡巡するよりも、『幻魔大戦』の言霊がすでに来ていたので、待つたなしですでにことは始まってしまっていたのでした。

もし、この20世紀も終わりに近づいた、現代世界で、イエス・キリストの再臨が行われたら、マスコミ時代に対応

して、当然のことながら新約聖書の記者が記述したやり方とは、布教の方法も異なつて行くことになるだろう。

再臨したイエス・キリストは、この高度に発展したマスコミ社会の貪欲な取り込みを、どのような手腕を発揮してかわして行くだろうか。とにかく、真の救世主であるならば、私が目の当たりにした、逃避一辺倒の拙劣な対マスコミの方策とはおよそ異なつた対応ぶりを見せるに違いない……

*

言うは易く、行ふは難し。私という人間の想像力は、釈迦の掌中にある孫悟空のようなもので、マスコミ時代のイエス・キリストを生き生きと描き出すなど出来るものではありませんでした。

もし、私が言霊使いと自分を名付けなければ、およそ『幻魔大戦』を書きつくことなど不可能だったに違いありません。知性と理性の枠内でいかに想像力をかき立てても、貧しい成果しか収められないが、言霊にすべてを預けてしまえば、後は言霊が仕事をしてくれるものです。

『幻魔大戦』のような、超常識的な作品は、人間主義の言い換えである知性主義、理性主義の手には負えない。それらに仕事をさせれば、所詮、“これまでであった小説”を模倣するしかすべがないのです。

本能的に、私はどうすればいいか心得ていたに違いありません。言霊にすべてを委ねること。猜疑心を棄てて、言霊を全面的に信頼すること。ともすれば、闇から放たれた刺客のように襲ってくる自信喪失と闘うには、言霊の“力”に絶対の信頼をつなぎ止めるしかなかったのです。

かつてない言霊小説を書こうとしているのだから、お手本になるものは何もありません。資料を集めて検討すること自体が成り立たないのです。作家にとつての『自己模倣』という奥の手も、今度ばかりは効きません。

自らの裡に潜む、泉を掘りあて、こんこんと溢れ出す言霊を導き出すほかにすべがないのです。ことの成否は、すべて自分を訪れる不可解な、神秘的衝動、言霊を信じるか否かにかかっていました。

一度書き出してしまえば、行く先は鞍の下の馬だけが知っています。私は言霊の大源泉を掘り当てたことを知ると、すみやかにすべてを言霊に委ねました。それは異次元の扉を開くのに似ています。

扉を開けば、そこに何も彼も自ずと展開されているもう一つの世界が存在する。いつも私がそうしてきたように、言霊の主体性を尊重し、彼のやることを出来るだけ損なわずに、導き出すことだけが、私に成しうる最善の途なのでした……

*



当世流行の「新趣向」の新宗教において、私の『幻魔大戦』に登場する言霊が大量に使われている、と多くの読者から教示を得ました。

無断使用、無断引用であることは事実としても、私はさほどこだわらない。おそらく私の意図したのとは異質な利用のされ方をしているのでしょうが、元来『幻魔大戦』はすべてを言霊から頂戴したもののなのです。

従って、『幻魔大戦』の『言霊』は私のものであって、私のものではない。読者たちは憤慨しているが、私自身にさほどの関心はないのです。もともと私は盗作問題には寛大なほう。

それよりも、『幻魔大戦』の『言霊』は、みずからの「力」で決着をつけるだろうと思っています。どのような落とし前がつくのか知りませんが、私には本当に興味がないのです。私が「呪い」をかけたなどと、くれぐれも誤解しないで下さい。

*

それらの無断で使用された言霊に、『光のネットワー
ク』があります。

『幻魔大戦』の読者たちには、ことのほか気に入られた言
霊でした。多数の人々の心の結ばれが、光り輝く一枚の布

のように織り上げられていく。そんな理想主義な色合いを帯びたイメージが読者たちの心をとらえたのでしよう。

愛し合い捧げ合う多数の人々の心が、更に巨大な宇宙エネルギーを導入し、病んだ精神の所産である『幻魔』をすら、最終的に癒す……そうした理想主義が人々の気持ちに快い共鳴を生んだのかもしれない。

言霊のスピードに乗って疾走感覚に酔い痴れながらも、私の心の裡には、その理想主義の快さに心身を委ねる気持ちが出来ていました。

理念としては、確かに快いけれども、ひとり隠遁者のように、世間を遠ざけて保養地の書齋に閉じ籠もった私にとり、『光のネットワーク』はあまりに遠かったからです。間断なく襲撃してくる、容赦のない霊的圧迫感や、霊障そのものである首、背中、腰の痛みに呻吟する身にとって、多数読者の不揃いな感性や心情、極端な理性、知性、悟性のばらつきは、躊躇いを生み出すのに十分でした。

なによりも人間という存在は、均質ではまったくありません。仏様のような上等な人間もいれば、目を背けたくなる下等な人間もいます。当然のことですが、後者の方が断然多数派です。

新宗教に関わり合っている時、出くわした善人たちには絶望的なまでに退屈したものです。過激なことをまたしても、と思われるかも知れませんが。

もちろんいうまでもないことですが、善人のすべてが退

屈な人々だといっているわけではないので、お間違えなく。精神の手綱を、他人に全面的に譲り渡してしまっている人々のことをいっているのです。他人とは新宗教の教祖のことで、口にする言葉は何も彼も教祖の受け売り、精神の働きの自立性、活発さ、清新さ、なにもない人々のことです。受け売り屋は、だれでもそうだが、恐ろしく退屈で後ろ向きです。自分の頭で何も考えない。教祖の書いた本の通りに喋っている。教祖の語り口をビデオや何かで耳にしたことを、何も考えず、自動的にコピーして、自分自身を権威付ける。

特に、その新宗教の教団の講師と呼ばれている人々のお寒いことといったらありませんでした。自前の中身はぜんぜんないのに、教祖の御託宣の受け売りだけで、慈愛に溢れた高德な指導者を自ら演出しています。このような連中は、一般人に紛れて、少し刺激的な質問をしてみると、すぐに尻尾を出したものです。『法敵』から挑戦されたと感じて、慈悲も愛もどこへやら、がぜん言動が荒々しくなります。

「あなたは自分の心を磨きなさいつつつ」
その高飛車なことといったらありません。私を悪霊憑きと見なしていることは明らかでした。セミナーの売り物『悪霊とり』のビデオで見掛けた教祖の頭ごなしの決めつけ方の完全なコピーです。教祖の法話のお粗末な受け売りをやっているうちに、自然と態度が大きくなるのでしよう。

教祖気取りの権威主義者は、多くの場合善人です。反省の大事さを説きながら、自らは反省などしない。自分に限って、反省を要するような悪いことは何一つしていない、と信じています。私のように反省すべきことが多すぎて、反省自体に嫌気がさすのとはわけが違います。他者である教祖の権威を自分のものにしていく不遜さは、決して反省の対象にはなりません。権威者と自ら一体化することで、権力主義者である支配者の幸福を味わうものです。

何度も念を押させて戴きますが、すべての善人について批判的なことをいつているわけではありません。しかし、自分を善人であると疑うことなく信じている人々は、まさに恐ろしいほど退屈です。彼らの精神が襍の擦り減った脳味噌のように平板なのは、自己満足と自己陶醉と独善に鼻の上までどっぷりと浸りきっているせいと断言します。

話をさせても、決まりきったこと（すなわち受け売り）しか語れない。自らの頭で考える習慣を失っているので、極私的な体験から生み出される、本人にのみ語れる生々しい表現が一切何もない。すべてはパターン化した受け売りです。何の刺激もなく、退屈至極で、まったくワクワクさせるものが払底しています。

世の中を生き甲斐のないほどつまらなくさせるのは、受け売りの専門家たちだ、と私はしんそこ思い知ったのでした。オリジナルはまだしも、受け売り屋のお粗末なコピーは精神が擦り減っていて、その退屈さは優に罪悪のレベル

に達しています。

けれども、もっともつと、比較にならないほど恐るべきは、やがて到る救世主の仕事が、自らをオリジナルにして、退屈至極なお粗末なコピーを大量に生み出すことなら世界の未来はまさしく絶望的としかいいようがありません。そんなおぞましい彼らにとつての理想世界には生きていたくない、と本気で考えてしまいます。

1991年12月 「幻魔大戦5」(リム出版)あとがき

幻魔大戦1

幻魔宇宙

デジタル立ち読み版

発行日

2000年5月20日

著者

平井和正

イラスト

勝連

デザイン

伸童舎

タイトルロゴ

成田公応上人

協力

株式会社アスキー

発行

有限会社ルナテック

〒125 0041

東京都葛飾区東金町3

13

6

info@ebunko.ne.jp

<http://www.ebunko.ne.jp/>

(C) KAZUMASA HIRAI, KATSUREN, LUNATE
CH

本作品は著作権上の保護を受けています。本作品の一部あるいは全部について、無断で複写・複製・転載することは禁じられています。